東京学芸大学附属高等学校紀要　61　pp.117～158，2023

生徒 Agency を育むカリキュラム・マネジメント(1)

～探究活動を軸としたカリキュラムづくり　第 22 回公開教育研究大会を受けて～

The Curriculum Management to Develop Student Agency 1
－ Curriculum Building around Inquiry Activities
to Take a Step Forward After the 22nd Open Seminar for Teachers －

研究部（研究推進）
齋藤　洋輔　　小境　久美子　　荒井　一浩　　佐藤　亮太　　中田　雅皓　　長谷川　智大　　森安　惟澄

＜要旨＞
本校を含めた高等学校においては，令和 4 年度より実施された新たな高等学校学習指導要領での観点別学習状況の評価，とりわけ「主体的に学習に取り組む態度」の評価には課題がある。その一方で，生徒の価値観や学習に対する態度に対してはたらきかけ，カリキュラム改善を図ることは重要であると考えられる。そこで，本校では OECD Education 2030 の中核的な概念である「生徒 Agency」という語を中心に据えた。具体的には，“創造性”・“切実性”・“先進性”の観点から生徒を刺激し，生徒 Agency を育むことを目指した。教員研修の機会を充実させ，公開教育研究大会を目指して，各教科・科目が公開授業への準備を行った。公開教育研究大会では，公開授業と研究協議会に加え，白井俊先生からのご講演を頂いた。公開授業や研究協議会での議論を踏まえ，次年度につながる課題を整理した。

＜キーワード＞　生徒 Agency，OECD Education 2030，“創造性”・“切実性”・“先進性”，教員研修，
カリキュラム・マネジメント

1．はじめに

まず，直近 7 年間の公開教育研究大会（以降，公開研と表記）における研究主題をまとめたものが表 1 である。これを見ると分かるように，毎年度，強調する点にはやや差異はあるものの，大きな研究主題の流れは一貫してきた。「資質・能力の育成（コンピテンシー・ベース）」，「観点別学習状況の評価（以降，観点別評価と表記）」，「教科横断的な視点」，「カリキュラム・マネジメント（カリキュラム改善）」に長く取り組んできたと言えるだろう。

その中で，一つの目印に置いてきたのが，令和 4 年度から実施された新たな高等学校学習指導要領（以降，学習指導要領と表記）の改訂である。表 1 に示したような研究の積み重ねはあったものの，観点別評価などの現実的な対応には，本校でも課題が見られた。中でも「主体的に学習に取り組む態度」の評価は，令和 4 年度の本校公開研においても中心的に取り上げたが，改善の余地は多いように感じている（詳細は，研究部（研究推進）（2022）参照）。

その一方で，次期の新たな学習指導要領を視野に入れながら，新たな観点での研究開発も望まれる。そこで「主体的に学習に取り組む態度」のように，生徒の価値観や学習に対する態度などに対して，どのようにアプローチしていくのかを学校全体で議論することで，新たなカリキュラムの改善を図ろうと考えた。その中で中核的な概念として，「生徒 Agency」という語を据えた。

2．生徒 Agency とは

白井（2022）によれば，Agency とは，“変化を起こすために，自分で目標を設定し，振り返り，責任を持って行動する能力”と定義されている。OECD Education 2030 のラーニング・コンパス※1 においても中核的な概念として位置付けられている。VUCA な未来において「私たちが実現したい未来（The Future We Want）」を実現させていくためには Agency が必要なのである。つまり，誰かに指示されたことだけをしているのでは足りないのである。OECD（2019）の中でも，Agency は「誰かの行動の結果を受け止めることよりも，自分で行動することである。形作られるのを待つよりも，自分で形作ることである。誰かが決めたり選んだことを受け入れるよりも，自分で決定したり，選択することである」と説明されている。

また，Agency と近い概念として，「主体性」があるが，Agency の方が「責任」の意識が重視されている。単に生徒が自分で考え，行動することを肯定するものではな

表１　公開教育研究大会　研究主題一覧

回	主題　～副題～
第15回（平成28年度）	コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発　～「教科の本質」に根ざした授業実践とその評価～
第16回（平成29年度）	コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発⑵　～「本質的な問い」とパフォーマンス評価の充実～
第17回（平成30年度）	コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発⑶　～カリキュラム・マネジメントの前にすべきこと～
第18回（令和元年度）	「学習評価」を軸としたカリキュラム・マネジメント　～教科等横断的な視点からの教育活動の改善～
第19回（令和2年度）	「学習評価」を軸としたカリキュラム・マネジメント⑵　～観点別評価の導入に向けた教育活動の改善～
第20回（令和3年度）	「学習評価」を軸としたカリキュラム・マネジメント⑶　～観点別評価から考える教育活動の改善～
第21回（令和4年度）	観点別学習状況の評価を活かしたカリキュラム・マネジメント　～いま問われる学習評価と学校の在り方～
第22回（令和5年度）	生徒Agencyを育むカリキュラム・マネジメント⑴　～探究活動を軸としたカリキュラムづくり～

く，他者との相互のかかわり合いの中で意思決定や行動を決めるものである。そして，Agency が他者との関係性を通して育まれていくものであるということは，生まれながらに変えられないものではなく，学習することができるものであり，変えることができるものであることも理解する必要があるだろう。

上記を踏まえると，Agency という概念は，改訂された学習指導要領や本校の教育理念の延長線上にあるものであると言える。Agency と本校の教育の方向性は親和性も高いと考え，今年度（令和５年度）以降の研究主題に盛り込んだ。本校のカリキュラムを改めて省み，本校の日常の文脈の中に“Agency を育む”ことを落とし込むことは大変意義深いことと言えよう。

※１ラーニング・コンパス：OECD が示したコンセプト・ノートにおいては，幅広い教育の目標を支え，「私たちが実現したい未来」，すなわち個人及び集団のウェルビーイングの実現に進んでいくための方向性を示すものである，と説明されている。Education 2030 プロジェクトにおける学習の枠組み。「学びの羅針盤」。

３. 今年度（令和５年度）の取り組み

⑴ 公開研究大会に向けての枠組みの整理

これまでの背景を踏まえ，今年度からの主題として，「生徒 Agency を育むカリキュラム・マネジメント」と掲げた。今年度の副題は「探究活動を軸としたカリキュラムづくり」とした。“探究活動”という語は，主に「総合的な探究の時間」の代替として実施している学校設定科目「SSH 探究」について指している（各教科・科目での探究的な学びも一部含む）。

昨年度の公開研にて，市川伸一先生（東京大学名誉教授）を招き，講演をして頂いた。その中で「授業（習得サイクル）」と「探究活動（探究サイクル）」が取り上げられ，それぞれの授業における“習得と探究”の連動，そしてカリキュラムにおける“（各教科・科目の）授業と探究活動”の連動の重要性についてお話しされていた。これに基づき，本校でも各教科の授業と探究活動が両輪となるようなカリキュラムづくりを目指す，という意味を込めて副題を設定した。

次に，各教科・科目の教員が生徒 Agency を育むという観点からカリキュラムを考えるにあたり，研究部（研究推進）で図１のようにキーワードを並べ，生徒 Agency を育むことについての枠組みを整理した。生徒 Agency を育むための必要な条件として，「学びが楽しいこと」，「学びが自分ごとであること」，「価値観を変容させる機会があること」という３つを提示した。また，生徒 Agency を育むことと各教科・科目の授業や探究活動との間を，“創造性”・“切実性”・“先進性”というキーワードで結びつけようと考えた。また，上記のような観点の元，「授業」と「探究活動」を両輪として，カリキュラムの改善を試みた。最後に，本校の実践を積極的に発信・普及するための仕組みとして，教育研究成果発信サイトを立ち上げ，ここで成果物を積極的に発信していく予定である。

⑵ 教員研修の整理・実施

本校のカリキュラムが生徒 Agency を育むものになるよう，今年度は表２のように教員研修を月１回程度（教

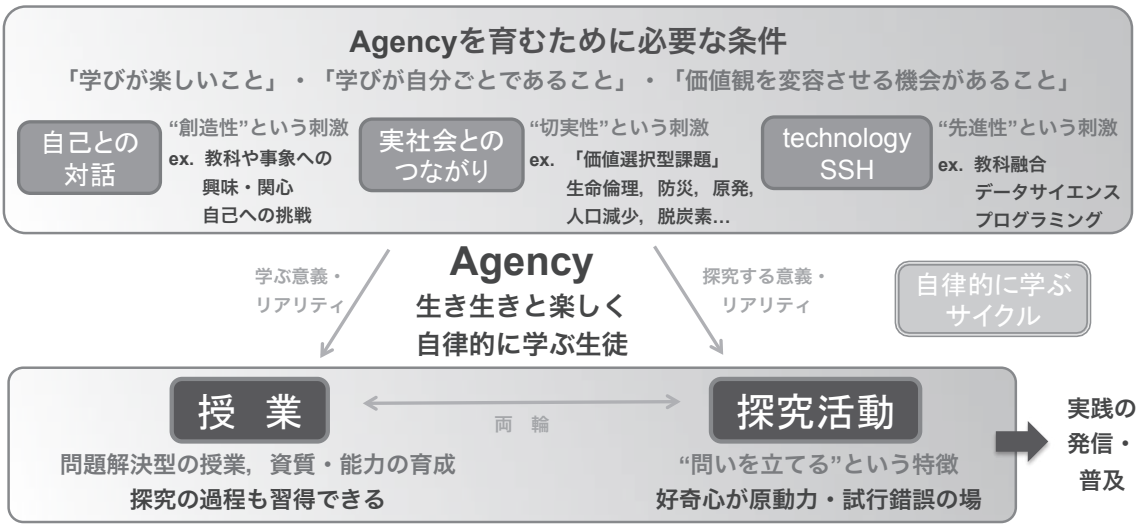

図１　生徒 Agency を育むために必要な条件（教員研修資料より）

育実習や学習旅行などがある２学期を除く）の頻度で実施し，公開研に向けて計画的に準備を進めた。昨年度末に実施した第０回では探究活動ルーブリックを，第２回以降の研修では各教科・科目のカリキュラムを，生徒 Agency を育むという観点から再検討した。このように今年度の副題を意識してもらうために各教科・科目の授業と探究活動からカリキュラムを見直すことにした。

また，この研修を踏まえて作成した新たな「探究活動ルーブリック」は，今年度の探究活動で生徒が自らの活動を振り返ったり，教員が評価をしたりする際に使用した。さらに，公開研の公開授業におけるパフォーマンス課題を評価するためのルーブリックは，探究活動ルーブリックの評価規準を踏まえて作成してもらった。このように教員研修の成果をカリキュラム改善に繋げてもらうように活動を進めた。

(3) SSH 事業との連動性

今年度は，本校 SSH 事業も経過措置期間の最終年にあたる。次年度のⅢ期目指定を目指して本校でも議論を進めてきた。そして，Ⅲ期目申請での研究主題を「生徒エージェンシーを育む次世代理数カリキュラムの開発と普及」とした。また，研究課題を実現させるための事業として，「次世代人材のための教科融合・教科連携での授業開発」や「SSH 探究基礎・SSH 探究・発展 SSH 探究」などを設定した。つまり，SSH 事業においても“（特に理数系教科・科目の）授業”と“探究活動”を連動させながら生徒 Agency を育むことを目指している。

以降では，今年度の公開研における各教科・科目の公開授業の様子，および協議会での議論について報告する。

表２　令和５年度　教員研修テーマ一覧

回	日時	研修テーマ
第0回	令和5年3月27日（月）13:00-15:00	「探究活動ルーブリックをAgencyの視点から再検討する」
第1回	令和5年4月27日（木）16:00-17:00	校内都合により中止
第2回	令和5年5月31日（水）16:00-17:00	「教科・科目のカリキュラムをAgencyの視点から再検討する（1）」
第3回	令和5年6月19日（月）16:00-17:00	「教科・科目のカリキュラムをAgencyの視点から再検討する（2）」
第4回	令和5年8月30日（水）13:00-15:00	「公開研に向けて教科・科目の提案を共有する」
第5回	令和6年1月25日（木）16:00-17:00	生成AIを活用した実践，「教科・科目の融合・連携を検討する（仮）」
第6回	令和6年2月26日（月）16:00-17:00	「教科・科目の融合・連携を検討する（仮）」
第7回	令和6年3月27日（水）13:00-15:00	「教科・科目の融合・連携を検討する（仮）」

公開研　公開授業Ⅰ

国語（言語文化）「生徒が積極的に古典を読むための学習指導の工夫 ～『伊勢物語』「梓弓」を教材として～」

授業者　佐藤　希世子

1．研究主題との関わり

本校が目指すAgencyとは「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」と定義されており、それを踏まえて国語科では古典分野のAgencyを「異なる時代の価値観・文化を学び、自分の見方・考え方を相対化する能力」と再定義した。今回はこのAgencyを踏まえ、単元「生徒が積極的に古典を読むための学習指導の工夫」を設定した。Agencyの「異なる時代の価値観・文化を学ぶ」ためにはまずは生徒達が古典そのものに興味を持つことが重要である。そのためこの単元では積極的に古典と生徒、現代をつなげる。そして国語科としてどのように「異なる時代の価値観・文化を学ぶ」かについては現代と異なる意味の言葉や古典特有の言葉に着目し、できる限り当時に近い形で本文を理解することが大切であると考える。「自分の見方・考え方を相対化する能力」については今回比較読みをすることで自分の考えを深めることを目指している。

上記の研究主題との関わりに加えて、今回の単元設定の経緯についても述べておくと、授業者は「生徒が古典に親しむこと」「生徒が自力で古典を読むことができること」を目標に日々授業を行なっている。まず「古典に親しむ」について、古典をおもしろいと思うのは時を隔てても現代の私たちと通じるものがあるとき、また逆に現代の価値観と異なることを知ったときだと考えている。「生徒が自力で古典を読むことができる」とは文法や古典単語を駆使して現代語訳できるだけではなく、自分で作品の内容を読み深めることができることも目指している。自分で作品の内容を読み深めるためには読みを深める観点も習得していく必要があると考える。「読みを深める観点」については日々模索しつつ授業に取り入れているが、現代とは意味の異なる言葉、古典特有の言葉に着目することは読みを深めるポイントの一つになるのではないかと授業者は考えている。今回は上記で挙げた「古典に親しむこと」「自力で古典を読むことができること」に加え、本校の協議テーマであるAgency（古典分野ではこのAgencyを「異なる時代の価値観・文化を学び、自分の見方・考え方を相対化する能力」と定義している）を考慮し、単元「生徒が積極的に古典を読むための学習指導の工夫」を設定した。

2．評価方法　～パフォーマンス課題の設定～

・知識・技能

評価の方法：振り返りシート

評価の内容：作品における「三年」の意味、枕詞の効果、古語「かなし」の具体的な内容について的確に理解している。

・思考・判断・表現

評価の方法：比較シート

評価の内容：『伊勢物語』「梓弓」、『大和物語』「蘆刈」について、二つの作品の内容を踏まえ、比べながら現代の共通点と相違点を述べ、その上で自分の考えを深めることができる。

・主体的に学習に取り組む態度

評価の方法：振り返りシート

評価の内容：単元で学んだこと、自分の考えが深められたことが具体的に述べることができる。

3．単元計画

〈単元の目標〉

・本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。
〔知識及び技能〕(1)オ

・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。〔知識及び技能〕(2)ウ

・作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えを持つこと。〔思考力、判断力、表現力等〕B 読むこと(1)オ

・進んで作品を読み、我が国の言語文化に特徴的な語句について理解を深めた上で、現代を生きる自分と古典を積極的につなげ、考えを深めようとしている。

〈単元の計画〉（全三時間）

・第一時『伊勢物語』「梓弓」の読解
　・本文における「三年」の意味、枕詞「あらたまの」の効果、古語「かなし」の意味を具体的に理解する。

・第二時『伊勢物語』「梓弓」、『大和物語』「蘆刈」の読解
　・『伊勢物語』「梓弓」、『大和物語』「蘆刈」の共通点と相違点を確認する。

・第三時『伊勢物語』「梓弓」、『大和物語』「蘆刈」を比較し、現代との愛のあり方について自分の考えをまとめる。
　・グループでお互いの文章を読み合い、振り返りシートを記入する。

4．評価の実際　～単元における生徒の変容と今後の課題～

第一時では主に「三年」「あらたまの」「かなし」と現代語と意味の異なる言葉に着目し読みを深めていった。振り返りシートでは「今と比べると「待つ」ということがとても孤独で寂しいものだったと思われる。」「現代を生きる私たちは、交通手段も連絡手段も整い、昔を生きた人々より恋愛を続けることのハードルが下がっているものかもしれないが、その分、一人であっても想い続ける時間というのは減っており、想い合う気持ちの強さというのは、弱く冷めやすいものになってしまったのかもしれない。」と古語の表現から本文への理解や自分の考えを深めることができたようである。第３時では『伊勢物語』「梓弓」と『大和物語』「蘆刈」にみられる愛のあり方について、現代の私たちとの共通点、相違点を述べ、自分の考えをまとめる活動を行なったが、そこでは、「昔の婚姻制度をふまえると、女性は男性の唯一になれず、男性も唯一を決めることができない。生活のために我慢するような愛のあり方が存在していたと思われる。」「女性はもともと夫を愛しているけど、同時に自分のことを好いてくれる別の男性のことも愛している。同時に二人以上の人を愛しているのに、それが何の違和感もなく書かれているから、現代よりも愛の形は寛容だったのではないか。」「現代は身分制度こそないとはいえ、大人になれば収入などで相手を選ぶことがある。また結婚となっても法律で禁止されていることではあるが部落問題が絡むことがある。表面上は自由な恋愛ができても本質は古典の世界と何も変わっていない。」と積極的に現代を生きる自分たちと古典をつなげ深めることができた。

今後の課題については、生徒が自分で作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えを持つことができるよう、授業で特にどの表現に着目することが本文の読みを深めるのかを意識的に行っていきたい。

5．引用文献

「新編日本古典文学全集12・竹取物語伊勢物語大和物語平中物語」小学館 1994 年
山口佳紀「伊勢物語を読み解く表現分析に基づく新解釈の試み」三省堂 2018 年
渡部泰明［編］「和歌のルール」笠間書院 2014 年

公開研　公開授業Ⅱ

国語科（文学国語）『こころ』分析のキーワードを考える

授業者　日渡　正行

１．研究主題との関わり

「文学国語」において生徒が文学作品を読むことによって，自らの価値観の特殊性と普遍性に目を向け，相対的な思考を身につけることを目指す。

そもそも文学作品は普遍性と特殊性をあわせもつ。特異な状況と個性的な登場人物によって織りなされるテキストを，書き手の独創性や独自性の発現として捉えるのであれば，特殊なものだろう。一方，人間の営みや心理についての普遍性に肉薄するからこそ価値を持つという観点からすると，普遍的なものとなる。

文学作品が持つ特殊性と普遍性を評論や意見文を通して考えることで，自身の価値観の振り返りにつなげていく。これができるようになることが「文学国語」における「生徒 Agency」なのではないかと考え，授業を提案した。

２．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

単元としての『こころ』に関する「意見文」をまとめる重要な課題であり，評価の中心としても設定している。今回の研究授業ではグループ活動を行い，その結果を Google フォームに入力してもらった。どのような形で話し合い活動に参加し，次の意見文を書く活動につなげていけるかを見て，評価した。そして，「意見文」を書くことがこの単元での最後の課題になっていることも伝えながら，ルーブリックで評価した。

グループでの話し合いをもとに，『こころ』を分析するための自分のキーワードを設定し，現代社会の問題や自分の関心ごとに合わせた意見文を書く，というのが課題である。一学期に書いたもの（角田光代「ランドセル」・中島敦「山月記」についての意見文）は分析のためのキーワードがすでに決まっていたが，今回は自分でキーワードを決めることがポイントである。ただし，どのようなキーワードでも良いのではなく，「現代社会」「自分の関心ごと」という枠組みを定めることで，生徒の意識を導いている。「現代社会」「自分の関心ごと」と『こころ』を並べることによって，時代背景が異なる遠い世界の話ではなく，生徒自身にひきつけて考えることができるようになる。そのように考えていく過程で「生徒 Agency」が育まれていくのではないかと考えた。

「意見文」は，ある意味では自分と離れたものになっている「文学作品」を自分ごととして捉えることができているかどうかの評価を重くしている。文書の構成や用語など，基本的な言葉の使い方ももちろん見ていくが，文学を分析するにあたって，それらしいキーワードを使って作品をわかったつもりになるのではなく，自分の生活やあり方に関わるものとして読んでもらいたいと思っていた（下記のルーブリック参照）。難しいことではあるが，自分の言葉・自分の考えと文学作品を突き合わせることで，文学作品を読んでいく意義が明確になるのである。それを念頭に置いて課題を設定し，評価した。

３. 単元計画（単元名：夏目漱石『こころ』を自分ごととして読む）

夏目漱石『こころ』を読解する。また，若林幹夫「漱石のリアル」を読むことで読解を深め，さらに自分たちの分析につなげる。生徒自身による分析に至ることで，『こころ』の内容を自分ごととして考えていく。

第一時間目　　『こころ』全体像の把握
第二時間目　　『こころ』上・中の内容の確認
第三～十時間目　　『こころ』下の内容の確認教科書を中心に読解する
第十一～十三時間目　若林幹夫「漱石のリアル」読解
第十四時間目　　『こころ』分析のキーワードを考える（本時）
第十五時間目　　意見文を書く

４．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

研究授業で示したグループでの活動ののちに，単元の中核となる「意見文」の課題に取り組んだ。生徒には Google クラスルームで課題を示した。Google ドキュメントで書き，オンラインで提出する。以下のルーブリックもオンラインで示した。

①自分でキーワードを設定し，『こころ』について 600 字程度で論じなさい。現代社会の課題や自分の関心に焦点を合わせた意見文にすること。

②なぜそのキーワードを選択したのか，説明しなさい（字数自由）。

	4	3	2	1
基本的な知識・技能の習得	分析するキーワードについて理解し，使うことができる。また，意見文の誤字・脱字，言葉の誤用がない。(4)	分析するキーワードについて理解し，使うことができる。また，意見文の誤字・脱字，言葉の誤用がほとんどない。(3)	分析するキーワードについて知っている。また，意見文の誤字・脱字，言葉の誤用がほとんどない。(2)	分析するキーワードについて知っている。(1)
論理的思考をもって問題を解決する力（論理性を意見文に反映させる力）	序論・本論・結論のような適切な構成をもち，それぞれの部分が効果的に結びついた意見文を書くことができる。(4)	序論・本論・結論のような適切な構成をもった意見文を書くことができる。(3)	構成を意識した意見文を書くことができる。(2)	まとまりのある意見文を書くことができる。(1)
自らの主張や考えを表現する力	独自性と説得性のバランス がとれており，発展的な提案を含む意見文を書くことができる。(8)	独自性と説得性のバランスがとれた意見文を書くことができる。(6)	独自性または説得性のある 意見文を書くことができる。(4)	意見文を書くことができる。(2)
生徒 Agency	現代社会や自分の関心ごとに合わせながら，発展的な内容の意見文を書くためのキーワードを選択することができる。(8)	現代社会や自分の関心ごとに合わせた，意見文のためのキーワードを選択することができる。(6)	意見文を書くことを意識したキーワードを選択することができる。(4)	キーワードを選択することができる。(2)

＊生徒に示した今回のルーブリック。（x）は点数で，点数は 6 点から 24 点になる。

提出された「意見文」を評価したところ，文学作品と自分とを結びつけて考えるという目標はおおむね達成できていた。特に，課題②を書いてもらったことで，生徒たちの思考の流れを見ることができ，結びつきを確認することができた。それが「生徒 Agency」の育成そのものになっているというのが授業者の予想であるが，今後も生徒たちの状況を見守っていかなければならない。ここで身につけた力を，他の文学作品や社会状況の分析や批評に「主体的に」つなげていくことができるかどうかは，短期的な観察ではわからないかもしれない。

一方，「意見文」の内容を見るに，期待していたよりもバリエーションに乏しいものになったとも感じている。これは今回の研究協議会でも指摘していただいたところであるが，社会学者による『こころ』の評論を読み，その後に「意見文」を書けば，当然のことながら生徒たちはそれに引っ張られる。また，グループでの話し合いを活かそうとすれば，話し合いの中の妥当な意見を自分の「意見文」に取り込むことになる。「独創性」のみを重視するわけではないし，多様な「意見文」を求めているわけではないが，生徒たちの中に「無難にまとめよう」とする意識があるのであれば，無難な方向に導かれてしまう構成になっていたのかもしれない。

今後も「文学国語」を進めていくにあたり，「生徒 Agency」を意識した授業を計画していきたい。

研究協議会

国語科「生徒が自分ごととして取り組むための学習指導の工夫 ～文学作品を学習材として～」

提 案 者　佐藤　希世子　　日渡　正行
助言講師　石井正巳（東京学芸大学名誉教授）

１．本校からの提案

公開授業Ⅰ「言語文化」：生徒 Agency を育む学習指導の工夫として今回提案のポイントは２つである。一つめは、古典領域と近現代領域との融合である。本校では言語文化を３単位で設置しており、週のうち２時間を古典領域に1時間を近現代領域に振り分けているが、年間指導計画を見ていただければ分かるように、古典と近現代文学とを組み合わせて単元を設計している。そうすることで、生徒が古典世界と現代との連続性／非連続性を認識しやすくすることを狙っている。二つめは、生徒が自力で古典を読めることを重視している点である。「分からない」という理由で古典嫌いになってしまうのは避けたい。ただし、現代語訳できれば終わりなのではなく、端折られていることが多いので内包するイメージを広げさせたうえで一つの訳へと収斂していく。今回の授業に出てきた「あらたまの」や「かなし」のイメージを広げていくことで、生徒たちの言葉の感覚も鍛えられていくと考える。

公開授業Ⅱ「文学国語」：本校では文学国語４単位を２年と３年で２単位ずつ分割履修させている。論理国語よりもやれることの幅が広いと考えて文学国語を選んだものであり、文学作品と評論を組み合わせて一つの単元を構成するよう年間計画を組んでいる。今回は、「別の作品や事象を批評している評論のキーワードを使って文学作品を分析する」という１学期までの活動から一歩進み、若林幹夫の評論を読んだうえで自分なりのキーワードを設定して漱石「こころ」を分析するという、より発展的な試みをした。それによって、自分と文学作品とを結びつけて考えることができることを狙った。文学国語の特色を生かして作品と評論とを行ったり来たりしながら読みを深めるなかで、事象・現象を自分なりの切り口で分析し、自分の言葉で批評し意見として述べる力を養って行きたいと考えた。

２．協議会における議論

質問⑴：教師からの「問い」のシャワーが印象的だった。オープン／クローズの問いなど、意識していることは？

授業者の回答：「問い」は大事にしている。生徒の知的興奮を喚起し、生徒と一緒に授業を作りたい。また生徒の答えを聞いて「そう読んでいたのか」と分かることもあり、やりとりの中で授業の道筋が定まっていく。また、知識が問われている問いなのか、自由に考えるべき問いなのかは、明示するよう心がけている。

質問⑵：今回の文学国語の授業は、最終的に高校３年生ではどのくらいの地点に到達させることを想定しているのか。

授業者の回答：３年での授業は、今年度の試みがどれくらい力になっているかにもよるが、２年での授業と同じ方向性でもっと自由度の高いものを扱っていきたい。また、今は文学を読むために評論を使っているが、二項対立などでは割り切れない現実を言葉にしている「文学」というものの価値を考えていければとも思う。

助言講師によるコメント

AI が進化する現下の状況で、国語の授業が生徒 Agency をどう育んでいくのかという今回のテーマは、現代的な課題である。本日の授業で扱った伊勢物語は 1000 年以上前、漱石「こころ」も 100 年くらい前の作品であり、生徒たちが生きている「現在」との落差を授業でどう埋めていくのかに関心があった。「言語文化」の授業では、原文をかっちりと読みながら生徒との活発なやり取りがあった。日本語の特徴は古文の方がより感じられる。「わがせしがごとうるわしみせよ」の箇所では生徒たちがざわついていた。ここは立ち止まってもっと深めたいところだった。作品をよく読むことが新たに常識を知ることにつながる。「文学国語」の授業は、文学と評論を合わせて読んでいく試みだった。20 世紀後半以降、国語科の授業は、文化人類学や記号論、とりわけ社会学に理論的に寄りかかってやってきた。先ほどの議論のなかで「二項対立ではない次の次元で事象・現象を分析させられれば」という発言があったが、それができれば国語科の授業は社会学を超えて自ら読みの述語を作っていくことができるだろう。

３．課題

一人ひとりの生徒の主体的な思考や判断をどう外化させ、評価していくかが課題となる。また、生成 AI によって文章等を生み出すことが可能になった今、人間の主体的な営みをどう捉えるかは、長期的課題になってくるだろう。

公開研　公開授業Ⅰ・Ⅱ

地理歴史科（地理総合）「地形から災害の可能性を考える」

授業者　松本　至巨

１．研究主題との関わり

地理は，高等学校で学ぶ教科・科目の中で，生活に最も密接した科目の１つといえる。地表の構造を扱う地理は，自然環境（地形・気候・水・植生・土壌など）や産業（農業・工業・商業など），資源・エネルギー，村落・都市，交通，人口，文化（衣・食・住など），民族（言語・宗教など），国家・国際理解などを広く取り扱う科目であり，私たちにとって身近な事象について多く学ぶものである。高等学校で学ぶことができる他の教科・科目との関連性が多いことから，地理という科目の枠の中だけで学習するというよりは，他の教科・科目との連携を意識した学びを実現させることにより，生徒が将来生きていくにあたって必要とされる力をより広く，深く身につけさせることができる。

2022 年度から年次進行で実施されている新学習指導要領において，地理総合は新たに必履修科目となった。地理の科目が必履修とされたのは，現在，地球全体の問題となっている温暖化をはじめとする環境問題や，日本各地で激化しつつある災害，世界各地で起きている民族や国家の対立といったことを，若い世代にしっかりと学ばせる必要があると考えるようになったからである。身近な地域で起きている問題はもちろん，交通機関が発達してボーダレスとなった現代では人やものが地球上のあらゆるところを往来し，世界各地の情勢が普段の生活の中においても深く関わりを持つようになった。情報が高速で地球上を駆け巡るようになり，さまざまな判断を瞬時に行う必要に駆られている。このような現代を生きていくために，広く多彩な事項を学ぶことのできる地理を全ての高校生に学ばせ，併せて現代世界に対応可能な思考力や判断力を身につけさせることにより，日本に限らず世界で活躍できる人材を育てようという目的をもって地理総合の必履修化がなされたのであろう。

今回の公開授業では，最近，国内で多発する災害に注目することとした。災害が起きる要因はさまざま考えられるが，今回は地形との関連性に重きを置くこととし，生徒との関わりを重視し，平野と丘陵を取り上げることにした。本校は東京都世田谷区にあるが，生徒の通学区域の設定はなく，東京都，神奈川県をはじめ広域から通学している。東京都東部から埼玉県東部にかけての利根川（下流部は江戸時代初めに人工的な流路の付け替えが行われたため，今は千葉・茨城県境を流れているが，流路変更前はこの地域を流れていた）の形成した沖積平野に住んでいる生徒もおり，地形と河川の氾濫による災害の関わりを理解しておくべきであると考えた。また，神奈川県東部の横浜市や川崎市などに広がる多摩丘陵には多数の生徒が居住しているが，ここは第二次世界大戦以降，東京のベッドタウンとして地形の改変をともなう宅地開発の進んだ地域であり，地形の特徴と災害の関係を学んでおく必要がある。1995 年におきた兵庫県南部地震では盛土の地域が地震による激しい揺れにより崩壊し，多くの人の命が奪われたからである。

私たちは災害について普段あまり意識しないが，ほとんどの災害は予期せず急に発生し，人々に甚大な被害を与える。自然災害の多い日本で暮らしていくためには，身近な地形などの自然環境と起こりうる災害について知っておく必要がある。これらに関する知識を身につけるとともに，災害時にどのような行動をとればよいかを考えさせることが重要であると考え，今回の授業を実施することとした。

授業は２時間連続で行い，１時間目は氾濫原を，２時間目は丘陵について扱うことにした。氾濫原の授業では，微地形の特徴と土地利用を地理院地図などを活用して学び，この地域で見られる災害対策について考えさせた。丘陵の授業では，新旧の地形図や空中写真を用いて地形や土地利用の変化を概観し，元の地形の断面図の作成を行い，どのように人工的な地形の改変がされたかを把握させ，盛土と切土について理解させた。２時間の授業を通して，基本的な地形の基本事項を学習し，身近な地域における地形に興味を持たせ，それぞれの地形において起こりうる災害を理解し，その対策について考えさせる力をつける目的で授業を計画した。授業では地理院地図を利用し，地形分類図や色別標高図，空中写真，断面図などの地理情報の有効利用についても扱ったが，過去の地図や地形断面は公開されていないため，地域の図書館に所蔵されている紙の地図を利用し，生徒に断面図を作成させた。地理院地図を用いることにより，地図を活用する能力を育成することが可能であるが，地図から断面図を作成することは，地形を詳細に読

み取る力をつけるとともに，地形図から地形を想像する力を向上させるものであり，アナログで時間のかかる面倒な作業であるが，地理的技能を育てる最も基本的な活動であると考え，あえて授業の中に取り入れた。地理情報が幅広く公開され，容易にアクセスできる環境となり，特別な事情がない限り普段このような作業をすることはないだろうが，頭を回転させて手で図を描く作業は地理的な技能を高める上で最も大切な学習活動であると考える。

今回の授業では，知識・技能および思考力・判断力を養う部分が多くなっている。これは，今後，主体的に学ぶためには基礎力が必要であり，特に知識・技能がないといくら思考を巡らせても発展的な発想ができず，本来的な資質・能力の向上につながらないからである。多くの知識・技能を活用して広く深く考えることにより，多彩な着想に到るのであり，さらに学ぼう，考えようとする意欲が湧いてくる。学校ではこのようにして生徒の主体的に学ぶ力を育んでいく必要があると考える。時間の関係で今回の授業では実施することができなかったが，授業の最後に生徒が自宅のある地域の地形を調べるとともに，自治体のハザードマップの種類を探し，自宅の位置は自治体ではどのような災害を予想しているかを書き出し，災害時にどのような対応をとるかまとめるレポートを課す予定であった。この課題はこの単元における評価の対象の１つとなり，思考力・判断力・表現力と学びに向かう力・主体性を評価する資料となる。

２．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

この単元では，学期末における期末考査とパフォーマンス課題によって評価をする。期末考査では地形および災害に関する知識が十分身についたかを確認する出題をし，その結果を知識・技能の評価とする。また，地形の成り立ちや変化について考えさせる問題を出題し，その結果で思考力・判断力の評価を行う。このほか上述のような自宅のある地域に関する地形と災害をまとめ，災害時にどのような行動をとるのかを考えさせるレポートを課し，これをパフォーマンス課題とする。この課題では，思考力・判断力・表現力と学びに向かう力・主体性についての評価を実施する。評価は，自宅のある地域の地形が調べられているか，自治体のハザードマップを確認したか，自宅のある地域はハザードマップでどのような災害が予想されているか，それぞれの災害時にどのような行動をとって身を守るかに注目する。これを思考力・判断力・表現力の評価材料とする。また，レポートの最後にこの課題に取り組みに関する振り返りを書かせ，学びに向かう力・主体性の評価を行う。

３．単元計画

第５章　生活圏の諸課題（計７時間，各項目１時間で実施）[130 二宮・地総 704 教科書による]

1　日本の自然環境と災害

1　世界からみた日本の地形の特色（本時２時間目）
2　世界からみた日本の気候の特色
3　風水害と防災（本時１時間目）
4　火山の噴火と防災
5　地震・津波と防災
6　都市型災害と防災
7　防災への心構え

今回は，公開教育研究会ということで，本校生徒と関わりの深い沖積平野と丘陵の地域を扱うため，授業の順序を変更し，上記のように１時間目に「風水害と防災」を，２時間目に「世界からみた日本の地形の特色」を扱った。

４．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

この単元を学んだことで，自然災害の多い日本で，自然とどのように向き合っていくべきか，普段から災害に対してどのように備えておくべきか，実際に災害が起きたときにどのように行動するのかということを考えるきっかけとなったのではないかと思っている。本校が所在する関東地方は，最近は比較的大きな災害が少なく，住民の災害への意識が低いと考えられる。しかし，首都直下地震などの大きな災害が起きることが予測されている上，人口も多いことから，災害時はかなり被害が出て混乱することが予想される。生徒には身近な地域について興味を持たせ，生活している地域の環境への理解を深めてもらうとともに，平時から災害への備えを十分に進めておくように導くことが，地理総合における重要な役割ではないかと考える。災害は辛いものであり，できれば目を背けたいものである。しかし，日本では災害を避けて生きていくことは難しく，いざという時のために真剣に考える必要がある。そのためには地理にとどまらず，歴史や地学，家庭科など関連する教科･科目と連携して，総合的に広く深く学んでいく必要がある。

研究協議会

地理歴史科（地理総合）「生活に活かせる地理の授業をつくる」

提 案 者　松本　至巨
助言講師　三橋　浩志

１．本校からの提案

本校では､1学期に地理実習（フィールドワーク）を含めて大項目「A　地図や地理情報システムと現代社会」を扱い、２学期に大項目「B」の中項目「生活文化の多様性と国際理解」と大項目「C　持続可能な地域づくりと私たち」を、３学期に生徒がグループで取り組む形で「B」の中項目「地球的課題と国際協力」を扱っている。今回の授業は､「C」の中項目「自然環境と防災」学習の一環として、生徒の生活の場でありながら教科書では深く取り扱われていない地形と、防災との関係について、地図を活用することによって知識・理解を深め、多面的・多角的に考察できるようにすることをねらいとした。

具体的には、利用しやすい地理院地図を使い、本校生徒で居住する者も多い氾濫原や丘陵地を取りあげた。氾濫原については標高差を可視化することで自然堤防の地形的な特質や土地利用の特徴を浮かびあがらせ、丘陵地については新旧の地図を比べて断面図を作成するといった作業を通して、地図を活用して地域の特性と防災上の課題を考えさせた。地理的な見方・考え方の基礎を身につけることで、各生徒が地元のハザードマップをもとに考察を深めていけるような資質・能力の涵養をめざした。

助言講師の三橋先生からは､限られた時間の中でのポイントの絞り方も参考になったとのコメントがあった。また、数点の補足があった。第一に､「自然環境と防災」のなかで、世田谷区という地域を重視する場合には、内水氾濫の方を取りあげる、第二に､「平野」のなかの「台地」といった区分の背景にあるスケールという地理的な見方・考え方に着目させる、第三に、モデルと現実との違いに留意する（都市では自然堤防にいたる前に人工堤防があることが多い。自然堤防形成メカニズムについて利用できる動画はいろいろある）、第四に、その地図で何が見えるのかを決める取得精度と表現精度の関係に着目させる、というように、限られた時間のなかでの選択とはなるが、どこを焦点化して深めていくかは学校に応じた工夫もさまざまに可能であろうことも指摘された。

２．協議会における議論

観点別評価については、定期考査でみたり、今回のように生徒が作った成果物をルーブリック評価したり、１学期の地理実習（フィールドワーク）のレポートや３学期の地球的課題への取り組み（発表･レポート）でみとったりしている。

協議のなかで取りあげられた点の一つは、地図を活用した学びの発展性についてであった。地図の学習については、機会に応じて小出しに技能を積み上げているが、自然災害伝承碑に着目させて歴史ともつなげたりしている。3学期になると生徒たちが主体的に課題の解決を考えていく際に、今昔マップなどのさまざまな地図を用いるような事例もみられる。

また、授業で取りあげる教材や視点をどのように選んでいくのかも議論になった。教科書に掲載されているようなオーソドックスな主題で、かつ、多面的・多角的な考察が加えられるところ、そのなかで、生徒の興味・関心を喚起できる身近なものといった観点が示された。特に、今回の例は生徒一人一人が将来に直面する可能性が高い真正の課題を扱っていることの価値への言及もあった。そのなかで、災害を扱う際に、生徒の被災の経験やその可能性を露にしてしまう側面について気をつける必要があることも論点となった。

さらに、エージェンシーをどのように育み、またその結果をみとるのかという論点も提出された。SSH 探究（総合的な探究の時間）のなかで、転移・応用ができるようになるのが理想的にも現実的にも王道であると想定しているが、実際にも地理的な見方・考え方を出発点に探究を進めているグループや個人が出てきていることが紹介された。

３．課題

新課程の新科目に変わったことで､生徒たちは何ができるようになるのか。生徒たち自身が主体的に探究できる資質･能力の育成であり、そこで重要となるのはテーマ学習である。「地理探究」の目標とされる「持続可能な国土像の探究」に向けてどう接続させることができるのかという点が、助言講師から課題として示された。また、防災と地域のリスクを考える際には、歴史的な視点や公民的な視点からも検討する必要があり､「歴史総合」や「公共」と連携した学びの構築も課題となることも指摘された。

公開研　公開授業Ⅰ・Ⅱ

数学（数学 B）「統計的な推測（母平均の区間推定）」

授業者　大谷　　晋

1．研究主題との関わり

母平均の区間推定を課題とした授業である。まず、母平均を推定する必然性のある場面設定を行い、生徒に提示した。災害に備えて、「世田谷区民全員分の米の備蓄量を考える」という課題であった。まず、生徒はどのように米の備蓄量を算出すればよいかをグループで話し合った。こういう場合は、一人で考えるよりは他者と意見交換をするということは有効であるようで、多様な意見が出た。生徒が、自分ごととして考えていたことが見て取れた。生徒が考えようとする場面設定は重要であると感じた。標本調査に関する､「層別」などのアイデアを出すグループは多かった。

区間推定の内容になると、自力またはグループでの解決が難しくなってきたが、これまでに学習した知識をもとに協力して問題を解決しようとする姿勢は見られた。

2．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

> ある試験を受けた高校生の中から、100 人を無作為に選んだところ、平均点は 60.0（点）であった。母標準偏差を 15.0（点）として、母平均 m（点）について、信頼度 95% の信頼区間を小数第 2 位を四捨五入して小数第 1 位まで求めよ。

という問題を期末考査で与えて、区間推定させた。正答率は 72.6% であった。

3．単元計画

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	備考
1, 2	2 つの試験のデータの平均値の考察から確率変数，分布，期待値の性質について整理する。	知 思 態		
3	積の期待値と和の分散の性質を，事象の独立を根拠に証明する。	知 思		
4, 5	x 秒選手権に取り組み，収集したデータからグラフを表示し，正規分布のグラフの性質を考察する。	知 態		
6	体力テストのデータとの比較から正規分布のグラフについてより深く考察し，標準化の必要性を認識する。	知		
7	標準正規分布表を用いて確率を計算する。	知	○	小テスト
8, 9	正規分布でないテストの得点から標本平均を繰り返し求める活動を通して，標本平均の分布について考察する。	知 思 態		

10, 11	具体的な探究活動を想定した場面において，仮説検定を行う。	知 態		
12, 13	米の備蓄量の推定を通して，無作為抽出の方法と母平均の推定について考察する。	知 思 態	○	ワークシート
14	不良品の割合を求める活動を通して，標本が大きくなると確率を求めることが難しくなることを確認する。	態		
15	不良品の確率が二項分布に従い，試行の回数が大きくなると二項分布は正規分布で近似できることを理解する。	知 態		
16	具体的な場面において母比率の推定と仮説検定を行う。	知 態		
17	定期考査	知 思		

４．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

具体的な場面を与えることで、多くの生徒が自分ごととして考えることができていた。やはり問題解決をしようとする動機づけは非常に重要で、数学において Agency を育成するためには、生徒が課題に取り組むような工夫は重要である。

しかし、母平均の区間推定の話になると、内容が難しくなり、解決は難しかった。教員の指導により、標本平均と母平均は必ずしも一致しないことの認識は十分に得られたが、その先になかなか進めなかった。そこで、教員から「母平均を 1.3 と仮定すると、標本平均が 1.2 となる確率はどの程度か」という発問を行った。この問いかけによって、昨年度学習した「仮説検定の考え」を用いて考えようとする生徒が増えた。ただ、母平均と標本平均の差を、標本標準偏差で割ろうとする生徒も多く見られた。これは、標本平均の分布についての理解が不十分であったためだと考えられる。授業時間数が限られている中で、十分に指導しきれなかったが、説明だけでなく生徒が実際に操作してシミュレーションできるような仕組みを作れば、効果は大きかったと考えられる。

研究協議会

数学「生徒 Agency を育む単元計画　－深い学びの実現に向けて－」

提 案 者　数　学　科
助言講師　小岩　　大

１．本校からの提案

生徒の Agency をどう育みどう評価するかについて、今回は数学Ｂの「統計的な推測」の単元における単元計画の提案と授業実践を行った。それに加えて、数学Ａの「図形の性質」の単元においても、焦点を当てる Agency を「既知のある定理をスタートとして、その定理内にとどまらず，その定理の周辺やその定理を含むより一般の定理を見つけるために，違う場合だとどうかと考え証明しようとすること」と考え、授業案および課題について提案した。具体的には、鋭角三角形で成り立ったことが鈍角三角形ではどのようになるか、という内容であり、既知のことを用いて考えることや、似た部分を対比させることで関係を深めること、そのような考えを通して学びが楽しいと感じる機会となることが期待される。今後、他の分野でも Agency を育む単元計画を考えていきたい。

２．協議会における議論

新過程になり、統計的な推測に関する授業を実際に行ったことのある教員はまだ少ないと推察される。その中で質問が多く出された。中でも、「今回の授業における目標の明確化、それに対する達成度」に関連する質問が多かった。「災害時を想定した世田谷区民に対する米の備蓄量を決めること」が目標であった。具体的な場面が与えられていたことで生徒は問題把握は適切に行うことができており、グループに分かれて、人口の年齢層の構成、財政面、など様々な側面から問題解決に向けて考えることができていた。この「現実問題に取り組むこと」が今単元における生徒 Agency を育む一番のポイントであると考える。しかし、この現実問題とそれを数学として考えていくことの間には溝があり、生徒自身でそれを埋めることは難しかった。本授業においても、教師が少しずつ情報を出しながら展開していく形となった。その過程には、「世田谷区の総人口（母集団）に対して抽出した標本の大きさが 100 であったが、この値を大きいとしてよいのか」、「母標準偏差を標本平均の標準偏差と同じとみなしてよいのか」など、生徒が疑問に思うことが想定される内容が含まれていた。これらに関しては、生徒の学習状況、時間的な問題を鑑みても今すぐに解決できるものは少ないが、疑問を明確にすることで、大学教育以降での学びにつなげていくことを期待している。また、今回設定したルーブリックに対して、線引きをして評価をすることは難しいが、生徒の抱いた疑問を「課題」とみなすことで、「課題を見出せているか」を一つの観点とし、それを生徒の振り返りからみてとることで評価につなげることができる。

次に、「統計をどのように使っていくのか？」に対しては多くの意見が出された。本校では、カリキュラムの一環で行っている探究学習において応用できることを一つの目標として、一年次に「仮設検定の考え方」を扱ってきた。生徒の習熟状況からすると活かせる段階まで到達できていないケースの方が多いが、実際に活用して統計処理を行っているケースは少しづづ増えつつある。そして何より、それまでに比べて、統計処理をする際に意識の変わった生徒の数は格段に増えた印象である。また、高校生は偏差値に非常に興味を持つということから、文化祭での物品販売で売値や仕入れ量をどのように決めていくのかを考えさせてみてはどうか、との具体例も挙げられた。このように、より現実的な場面を設定し、生徒がそこで統計を活用できるような力をつけさせることが必要である。そのために、数学Ⅰでのデータの分析とのつながり、情報科など他教科とのかかわりを見直していかなければならない。

３．課題

・他教科との連携、特に統計分野では情報科と具体的につめていくことが必要になる。
・課題を自分ごととし、数学化するためにどのように事象を提示するか。
・授業で生徒の考えや態度のよさをどのように価値づけるか。

公開研　公開授業Ⅰ・Ⅱ

理科（物理基礎）「音速測定の実験デザイン」

授業者　西村　墨太

1．研究主題との関わり

Agency とは，変化を起こすために，自分で目標を設定し，振り返り，責任を持って行動する能力である。これに基づき，理科としての Agency を，課題設定から実験の企画，実施，試行錯誤を行うことで養われる問題解決能力と定義し，「生徒による実験デザインと評価活動を通して Agency を育む」というテーマで研究を進めている。

そこで物理科では令和２年度より，物理基礎の授業内で，生徒が自ら課題や仮説を設定し，検証計画を立案し，実際に実験を実施して結果を考察し，一連の探究の過程をレポートやプレゼンテーションとしてまとめて発信する探究的な活動の導入を試行してきた。本公開授業では，特に波動単元の総括的評価課題「音速測定の実験デザイン」について公開した。なお，生徒による実験デザインや，探究的な活動に関する取り組みは，国際バカロレアのカリキュラムを参考にしつつ，本校物理科で伝統的に重視してきた探究的な生徒実験中心のカリキュラムを，再構成する形で構築した。

2．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

総括的評価課題「音速測定の実験デザイン」では，主に「主体的に学習に取り組む態度」について，表１のルーブリックに基づき評価を行った。評価の対象は，生徒個別に作成した実験デザイン及び振り返りのプリント，グループごとに作成した実験デザイン，実験記録，ポスター，そして，活動中の生徒の行動観察とした。主体的に学習に取り組む態度のうち粘り強く学習に取り組む側面については，特に「問題解決に向けて粘り強く取り組む姿勢」の観点で評価を行い，「問題解決に向けて他者と協働できる力」「生徒 Agency」の二つの観点については，共同 Agency の考えに基づき設定した。共同 Agency とは，「親や教師，コミュニティ，生徒同士の相互作用的，相互に支援し合うような関係性であって，共通の目標に向かう生徒の成長を支えるもの」とされており，教師や生徒が，教えたり学んだりする過程において共同制作者となったときに生じるものである。本実践では他の班や教師の発想を知り，これらを自分の班の探究に活かせないか議論したりしながら，実験に取り組めているかを評価した。

表１

育成する資質・能力		4	3	2	1
観点	持つべき視座				
主体的に学習に取り組む態度	問題解決に向けて粘り強く取り組む姿勢	既習事項を基に，科学的に裏付けられた結果を得るべく試行錯誤しながら探究に取り組んだ。	既習事項を基に，試行錯誤しながら探究に取り組むことができる。	探究の過程を一通り実行できたが，粘り強く取り組んだとは言いがたい。	探究の過程の一部を実行することができた。
	問題解決に向けて他者と協働できる力		班員と協働して，実験の精度を高めたり，新たな実験に挑戦したりしている。	自分の役割を見つけ，班員と協働して探究に取り組むことができる。	自分の役割を見つられず，班員と協働することが難しい。
	生徒 Agency	生徒が学びを自分ごととしっかり捉えられており，生徒が主体となって学びを進めることができる。	生徒が学びを自分ごとと捉えられており，生徒も主体的に意見を示しながら学びを進めることができる。	生徒が学びを自分ごとと捉えつつあり，教員が主導しているが，生徒も積極的に学びを進めている。	生徒が学びを自分ごとと捉えるには至らず，教員からの指示に従って学びを進めた。

3．単元計画

公開授業を含む波動単元の授業は，表２のように実施した。２～６時は教育実習生が担当した。一部の授業は，感染症拡大防止による学校閉鎖のため，オンライン同期型授業の形式で実施した。表２の「形」は形成的評価のための課題としての生徒実験,「総」は総括的評価のための課題としての生徒実験をそれぞれ意味している。

表２

時数	内容　・実施した生徒実験	評価
1	波とは	
2	音波	
3	声の波形の観察	形
4	独立性，重ね合わせ，定在波，反射	
5, 6	弦の振動	形
7	音波の定在波，反射	
8 ～ 10	気柱の振動	形
11 ～ 13	音速測定の実験デザイン	総

波・音に関する講義，生徒同士での議論活動，声の波形観察や弦および気柱に生じる定在波に関する実験などを通して，知識を獲得するとともに，デジタルオシロスコープ，低周波発信器などの実験器具や，PC・スマートフォンのアプリケーションの使い方に関する技能を，徐々に身に付けさせていくことを目指した。そして，それまでの波・音の学習を活用し，音速測定の実験デザインに取り組ませた。初めに生徒個別に音速測定の実験デザインについて検討させ，その後，クラス内で考えを共有しつつ，同様の実験デザインを計画した生徒同士でグループを組むよう指示をした。どの程度の規模・精度で音速を測定するのか（目標設定），どのような実験を行い，データ処理を行えば音速を測定できるか(計画), 実験の実施にあたって活用できる知識や技能として何を持っているか(能力や機会の評価), 探究はうまく進んでいるか（モニタリング, 逆境の克服), といったことをグループで議論しながら活動を進めさせた。そして，これら一連の探究の過程を，ポスターにまとめさせた。

4．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

生徒は実験デザインにおいて, オシロスコープやPC･スマートフォンのアプリケーションを活用して音波を記録し, そこから音速算出のために必要な物理量を抽出して計算することや，気柱の振動実験のように，これまで実施したことのある実験を音速測定という視点で改めて捉えなおし，より高い精度の実験とするためにはどうすれば良いかを工夫したり，さらには，インターネット上に掲載されている音速測定の実験についての情報を，本校の実験室の環境や使用可能な実験器具に応じてアレンジを加えて実施するなどを想定して議論を重ねていた。グループ内で考えを出し合い，より良いデザインとなるよう熱心に議論しており，グループで取り組む利点を生かしていた。実験を行った場面では，どのグループでも１回目の実験の反省を生かして，実験精度を向上させられるよう工夫しながら実験したり，限られた時間の中でも多くのデータ数が得られるよう役割分担をしたりしていた。

探究の過程を通して，随所に生徒同士での協働的・能動的な活動の様子が伺えたり，自分の事と課題を捉え，取り組む様子が伺えたりした。音速を測ってみたい，より正確に求めてみたい，そのためにはどのような工夫が必要かという試行錯誤している姿は，まさに生徒 Agency が発揮されたと言えるのではないだろうか。

今後の課題としては, このような生徒 Agency が発揮されていることをいかにして教師は評価し, 生徒たちにフィードバックを返すことができるかについて検討することである。また，物理基礎の授業内での探究的な活動で生徒 Agency が伸長されたときに，物理概念の獲得や物理に対する学習姿勢・態度の変容にどのような影響を及ぼすのかという点も検討していきたい。さらに, 教科･科目の授業における生徒 Agency の伸長が, その他の文脈, 例えば「SSH 探究（総合的な探究の時間)」での探究活動という文脈における資質・能力への寄与は，どのようなものとなるのかについても検討したい。探究活動を軸としたカリキュラムマネジメントを考えていく上で，非常に重要な点である。

公開研　公開授業Ⅰ・Ⅱ

理科（化学基礎）「化学電池を評価する」

授業者　成川　和久

１．研究主題との関わり

Agency を育むための一つとして，物事を科学的な視点を持ちながら観察する姿勢を養成し，批判的（クリティカル）に考えさせたり，社会と科学技術の繋がりやそれらの改善や改良をする態度と意欲を示させたりすることが有効であると考える。

そのために，身の回りの日常生活で頻繁に利用をしている化学電池を題材にする。化学電池は身の回りで利用される“素晴らしい”ものであるが，何を持って“素晴らしい”のか，個人で具体的に考えさせる。そして，具体的な“素晴らしい”と考えた事項を評価項目として，実験で電池を作成して，作成した電池の評価を生徒が行う活動をさせる。その後，電池やその評価基準に対する発表やディスカッションなどを通して各人の結果を共有させる。最後に，改めて“より素晴らしい”化学電池とはどのようなものかを考えさせて，改めて電池の評価項目とその評価基準を作成させる。

これら一連の過程を通して，社会変革を引き起こすために必要な，科学的な視点，物事を批判的に見る視点，社会との繋がり，物事の改善や改良を試みる態度や意欲を育成することで，Agency の１つを育むことを目指す。

２．評価方法　～ Agency を育むための評価基準 ～

本時（8, 9/12 時間目）　“素晴らしい”電池の作成

	4(A)	3(B)	2(C)	1
知識 (Knowledge)	電池の構造を理解して，酸化剤・還元剤の働き，電極の役割，電解質の必要性などを理解している。	電池の構造や酸化剤・還元剤，電解質が必要なことを理解している。	電池は酸化還元反応を利用していることを理解している。	電池と酸化還元反応の関係性が理解できていない。
スキル (Skills)	手引きに記載されている電池を作成して，電流値などの測定と各物品に対するパフォーマンスを記録できる。	手引きに記載されている電池を作成して，電流値などの測定か，各物品に対するパフォーマンスのいずれかを記録できる。	手引きに記載されている電池を作成できる。	手引きに記載されている電池が作成できない。
態度および価値 (Attitudes and Values)	設定したルーブリックで化学電池を評価して，それらを他者に共有することや議論ができる。	設定したルーブリックで化学電池を評価して，それらを他者に共有できる。	設定したルーブリックで化学電池を評価する。	設定したルーブリックで化学電池を評価しない。

本時，次時以降（9,10,11/12 時間目）　“より素晴らしい”（探究的な電池）の作成

	4(A)	3(B)	2(C)	1
知識 (Knowledge)	電池の構造を理解して，計画の達成に対して適切な酸化剤・還元剤や電極，電解質を利用している。	電池の構造を理解して，電池に適切な酸化剤・還元剤や電極，電解質を利用している。	電池の構造を理解して，電池として作動する酸化剤・還元剤を利用している。	電池と酸化還元反応の関係性が理解できていない。
スキル (Skills)	実験計画書に沿って電池を作成して，結果の測定や記録ができる。	実験計画書に沿って電池を作成して，電池としての作動を確認できる。	実験計画書に沿った電池のつくりを作成できる。	実験計画書に沿った電池を作成しない。
態度および価値 (Attitudes and Values)	設定したルーブリックで化学電池を評価して，実験計画やルーブリックの妥当性や発展性を議論できる。	設定したルーブリックで化学電池を評価して，実験計画の妥当性を議論できる。	設定したルーブリックで化学電池を評価する。	設定したルーブリックで化学電池を評価しない。

３．単元計画

酸化還元の定義　⇒　酸化数　⇒　酸化剤・還元剤　⇒ 酸化還元反応の化学反応式と量的関係　⇒　イオン化傾向　⇒　化学電池　（全 12 時間）

○ 前時の活動

・酸化還元反応とその原理から，化学電池の基本構造とその原理を学ぶ。

・化学電池は身の回りで利用されている“素晴らしい”ものであるが，具体的に何が素晴らしいのか？と提示して，酸化還元反応の利用としての，“素晴らしい”化学電池の具体的な評価の項目と評価基準を作成する。

○ 本時の展開（1 時間目）

・化学電池（ダニエル電池，鉛蓄電池，マンガン電池）を作成する。

・前時に考えた各自のルーブリックを使って，個人で電池を評価する。

○ 本時の展開（2 時間目）

・１時間目と異なる班を編成する。

・前時の実験結果とルーブリックの評価を他者と共有する。

・実験結果や個人が設定したルーブリックがどうだったかなどを議論する。

・議論した結果をいくつかの班に発表させる。
・実験した結果や議論の活動，そして，社会や日常生活での電池の利用から，“より素晴らしい”電池のための改善や改良の視点を持つことを意識させながら，改めて，“より素晴らしい”電池を評価するルーブリックを作成する。
〇 次時以降
・前時に作成した“より素晴らしい”電池の評価基準の視点を持ち，現代社会における実用電池とその利用について学ぶ。
・個人が作成した“より素晴らしい”電池のルーブリックを実験班で話し合い，1つのルーブリックにまとめる。
・“より素晴らしい”電池の評価基準を達成する電池のため，その電池の構造とそれを作成する実験計画を立案する。
・各班が考えたルーブリックと，それを達成するために考えた実験計画に沿って，電池を作成する。その電池を班で作成したルーブリックで評価し，よりルーブリックの評価基準を達成するための工夫等を考えさせる。

4．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

本公開研究大会で公開した公開授業の前時では，化学電池は“素晴らしい”と認識した後に，個人に“素晴らしい”化学電池の評価基準を作成させた。化学電池の講義については，化学電池の基本構造とその原理については触れたが，各種の具体的な電池には触れていない。

本時1時間目では班ごとに，ダニエル電池，鉛畜電池，マンガン電池を作成し，その電池の働きを観察しながら，個人で作成したルーブリックでそれぞれが評価活動をおこなった。実際に実験を通して電池を作成してその性能を観察することで，自分が設定したルーブリックにどのような視点があるとよかったかなどを感じとることができた生徒が多かった。

本時2時間目では，1時間目で実験をおこなった班ではなく班を再編成して班分けをした。新しい班で，各自の実験結果や作成したルーブリックとそれを用いた電池の評価の共有などの話し合いをさせた。このとき，班ごとに同じ電池を作成したが，電池によって作動したものが班によって異なるなどの気づきがあり多くの班で，なぜ異なるのかなどの議論が活発におこなわれていた。その後，議論したことなどをいくつかの班に発表させたところ，実験により作成した電池が同じでも作動したものに差があることがわかったが，自分たちの設定したルーブリックによる評価だと電池の性能の“素晴らしさ”の優劣の判断をつけるのが難しい，などの意見がでてきた。このことは，生徒が1回目に作成したルーブリックは，これまでの日常生活の経験や学習した化学電池の基本構造の知識だけでルーブリック（評価する観点）を作成したが，電池を科学的に評価して議論をするための視点で見たときに，不足していた点やよりあると良かった点などの照準が絞れたことが示唆される。イメージを多く持った状態で化学電池の“素晴らしさ”を考えたが，実際につくってその性能を調べたことで，化学電池を評価するために必要だった科学的な視点に気づくことができたと考えられる。また，実際に電池を作って作動させることで，想定よりものを電気で動かすことが難しいことや，動いたとしても液体をこぼしてしまうなどのことから実用するには安全性の観点も必要であったことに気づいた，などの意見もあった。

これらのことから，電池の働きが，活用される・有益であるなどの具体的に評価するべきことについて見る視点が養われたこと，化学電池での酸化剤や還元剤の用いられかたの理解の定着と実用電池に向けての酸化剤や還元剤，その他電解質などの工夫は何かなどの発想の拡大がなされた，と考えられる。

それらを合わせて，本時2時間目の最後に，実用社会で日常的に安定して利用されているような“より素晴らしい”電池のためには必要なことは何か考えさせ，それらを評価する評価基準のルーブリックを考えさせ，評価する視点やそれらを達成しようとする姿勢や態度などの育成を目的とした活動をおこなった。

5．引用文献

OECD ラーニング・コンパス 2030 について，白井 俊，諏訪 哲郎，森 朋子　著，環境教育　2021 年 31 巻 3 号 p. 3_3-9
高等教育におけるグループワークを取り入れた 学習環境デザイン，後藤大二郎　著，
J. Fac. Edu. Saga Univ，Vol. 7, No. 1（2023）135 ～ 148
OECD Future of Education and Skills 2030，（https://www.oecd.org/education/2030-project/）
主体的・対話的で深い学びの具現化に寄与する評価の研究，竹田 大樹，鈴木 一成　著，理科教育学研究 61 巻（2020)）3 号

研究協議会

理科「生徒による実験デザインと評価活動を通し Agency を育む」

提 案 者　東京学芸大学附属高等学校　理　　科
助言講師　東邦大学理学部教養科 教授　今井　泉

1．本校からの提案

⑴理科としての Agency とは何か

・課題設定から、実験の企画、実施、試行錯誤を行うことで問題解決能力を養う。

・Agency の育成を望む。

⑵カリキュラムをどう改善するのか

科学・サイエンスが社会においてどのように活用され、発展を遂げてきたのか、これからどのような技術、知識が必要となっていくのか。これからの科学技術の進歩を担う次世代の育成に必要な Agency をイメージして授業展開を行う必要がある。

・「単元の初め」は、原理などを示すのみで、中学校までの知識で応用し発想力、興味関心を育む。

・「単元の終わり」に、それまでの知識を活用して、目標としている結果を導く創意工夫を行う。

2．協議会における議論

・授業評価について、実際に教科でできることは限られているが、教科を横断することは可能ではないか。

・探究活動においてまずは知識が必要である。初等、中等教育レベルは問題解決的傾向の強い探究である。

・IBL は、生徒を責任ある学習者に変え、学習プロセスが主体的なプロセスであることを認識させること、「変化を起こすために自分で目標を設定すること」が大切である。単元、年間の指導計画を行い、学校の状況に応じた適当な強度の探究レベルの実践が必要である。

・本日の授業は、学習の状況に応じた適度な強度の探究レベルの実践が行われていた。プロセスの部分が実験、観察が key になると考えられる。「理解」から「考察」そして「探究」へとつながる。見通しをもつこと、見通しを持たせることが大切である。日本はグループで話し合うことしても、個人で考えることが少ないのではないか？

・まず、個人で考えることを出発とし、グループで交換しあう行程が大切である。高校では科学的な考え方が必要である。

出席者の発言・質問

(物理)実験のカリキュラムについて。評価をどのようにするか。普段の努力を評価していきたい。
実験で用いるスマートフォンのアプリは何を用いているのか。実験をどのような流れで作っていくのか。

(化学)ルーブリックは生徒評価のツールであるが、生徒が評価基準を作ることによって、生徒自身が自分の学習への取り組みを変えていくためのきっかけになるのではないか。
ルーブリックについて、成績をつけるためのツールとして用いるだけでなく、日常生活や学びの意識を向上させるためのものであることに気づかせたい。

(生物)実験できることとできないことについて議論し、電子顕微鏡の使用も含め情報交換できた。
授業を作る観点についての情報交換ができた。

3．課題

「授業者の手立て」として、高い専門性を持った教員により、生徒に助言を行うこと必要である。「研修会に参加」することで、「生徒の学びの変化」を促し、確認することで「教員としての向上」が可能である。

生成ＡＩについて、大学は実践を取り入れ始めている。Chat GPT の使い方によって学校の在り方が変わる。

今後、避けては通れない課題である。

公開研　公開授業Ⅰ・Ⅱ

保健体育（保健）「性感染症はなぜ蔓延するのか」

授業者　中田　雅皓

１．研究主題との関わり

Agency とは，変化を起こすために，自分で目標を設定し，振り返り，責任を持って行動する能力である。また，本校は「本物教育」を目指している。この２点を融合した保健教育とはどのようなものか考えたときに，“生徒が学びを自分ごととして捉え，いかに実生活に結びつけて思考，行動できる機会を与えられるか”だと考えた。さらにその過程の中で，多様な考えに触れ，自らの価値観を捉え直す機会を作ることが重要だろう。

そこで本授業実践では，教室で誰もが安全に実施できる成分・薬品での実験を通して，性感染症の広まり方を知ることでリスクに気付き，自分ごととして捉えさせることを契機に，生徒自身の価値観を捉え直し，日本社会で現在起きている性感染症の蔓延を防ぐための課題解決型授業へと深めていくこととした。

２．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

主に「主体的に学習に取り組む態度」「思考・判断・表現」について表１のルーブリックに基づき評価を行った。評価の対象は，生徒が個別に作成しデータ（Google スライド）で提出した“日本における性感染症の蔓延を防ぐ根本的な解決方法”，そして活動中の生徒の行動観察とした。表面上の解決方法の提示ではなく，根本的な解決を図るための新たな価値の創造を期待している。但し，この問いに対する明確な“正解”を見つけることは困難である。そのため，自らの考えを適切に主張し，聞き手に回る際は発言者との双方向のコミュニケーションをとり，議論を重ねながら正解のない問いへ思考するプロセスを評価した。

表１

育成する資質・能力		4	3	2	1
観点	持つべき視座				
思考・判断・表現	自らの主張や考えを表現する力	聞き手を意識した共有ができる。また，聞き手との双方向のコミュニケーションができている。	聞き手を意識した発表ができる。また，質疑応答では概ね適切に対応することができる。	聞き手を意識した発表ができる。ただし，質疑応答の対応には課題がある。	聞き手を意識できていない。また，聞き手の質問への応答が明確に応答できない。
主体的に学習に取り組む態度	課題解決に向けて他者と協働できる力	多様な他者と協働しており，新たな価値を創造することができる。	多様な他者と協働しており，新たな価値を理解・受け入れることができる。	自分役割を見つけ，多様な他者と協働することができる。	自分役割を見つられず，多様な他者と協働することが難しい。
	生徒 Agency	学びを自分ごととしっかり捉えられており，自ら課題を見つけ，目標を定め，適切に選択しながら学びを進めることができる。	学びを自分ごととして捉えられており，生徒が主体となって学びを進めることができる。	学びを自分ごとと捉えつつあり，教員が主導しているが，生徒も積極的に学びを進めている。	学びを自分ごとと捉えるには至らず，教員からの指示に従って学びを進めた。

３．単元計画

公開授業を含む２学期の授業は，表２のように実施した。

どの単元においてもできる限り生徒の生活に近づけ，その中で，取り扱う題材の本質的な問いを設定する。その“なぜ”を通して調べ活動や議論をはじめ，常識・当たり前だと思っていた具象に正面から根拠を求め，物事の本質に迫ることを目指している。さらにその過程で，それらの具象に対して実は誤認していた，など価値観を変容できる機会を随時設定している。

表 2

<table>
<tr><th colspan="2">時数</th><th>項目</th><th>内容</th></tr>
<tr><td colspan="2">1</td><td>事故の現状と発生</td><td rowspan="4">教育実習生</td></tr>
<tr><td colspan="2">2</td><td>交通事故防止の取り組み</td></tr>
<tr><td colspan="2">3</td><td>安全な社会の形成</td></tr>
<tr><td colspan="2">4</td><td>薬物乱用と健康</td></tr>
<tr><td colspan="2">5</td><td>喫煙と健康</td><td>新型タバコやシーシャは有害性を抑えられているのか</td></tr>
<tr><td colspan="2">6</td><td>飲酒と健康</td><td>「酒は百薬の長」「J カーブ」の真偽
海外の人はなぜ日本で路上飲酒するのか</td></tr>
<tr><td colspan="2">7</td><td>現代における感染症の問題・感染症の予防</td><td>感染症予防の三原則
不織布マスクは他のマスクと比べてなぜ有効性が高いのか</td></tr>
<tr><td rowspan="2">本時</td><td>8</td><td rowspan="2">性感染症・エイズとその予防</td><td>性感染症はなぜ蔓延するのか</td></tr>
<tr><td>9</td><td>蔓延を防止するために意識するべき点</td></tr>
<tr><td colspan="2">10</td><td>精神疾患の特徴・精神疾患患者への対応</td><td>心の健康とは
SNS との向き合い方</td></tr>
</table>

4．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

本授業実践の大まかな流れとして，授業冒頭に①性感染症の蔓延のリスクを体感する実験を行い，それを②防ぐための方法を思考させた。さらに，③性感染症が蔓延してしまう原因を思考させ，根本的な解決に繋がる方法をグループで議論させた。その後，④実際の保護者の方々からご協力･ご回答いただいた“高校生（お子さん）に向けた，性･性行為への向き合い方のメッセージ・願い”を読ませ，⑤行動科学者デズモンド・モリスの「親密さ（ふれあい）の 12 段階」から人には様々な行動への価値観があることについて触れた。

これらの活動を通じて生徒は性感染症の蔓延が身近な存在であることを捉え直し，自分ごととして性感染症と向き合い，グループ活動での議論においては考えを出し合い，明確な解がない問いへ少しでも解に近づけるよう熱心に議論しており，グループで取り組む利点を生かしていた。さらに，④では，②の内容（知識）は教育現場では必ずと言っていいほど学ばせているにも関わらず性感染症が蔓延することへの打開策の一つとして，知識だけでない心理面へのアプローチから実施した。多くの保護者の方々からご協力いただき，特に本授業実践内容に対して「大事な内容であるとは認識はしつつも，我が子と近しい存在が故に直接話すことができていない」とのご意見が多く，生徒からも同様の意見が多数出た。また生徒からは，それに加え，「親がこれほどまで自分のことを考え，願ってくれていることに初めて言葉として触れ，親からの愛を感じ，自分の体は自分だけのものではなく，より一層大事にしていかなければならないと感じた」との感想・意見が多く出た。この取り組みについて生徒にアンケートを実施したところ，“ぜひ続けてほしい”との声が非常に多く，生徒とその保護者の架け橋になれたこと，さらに学校教育として，教員と保護者の方々との両輪となった教育に少し近づき，「本物教育」に触れられたのではないかと考える。また，⑤においては 12 段階をバラバラに示し，理想と考えられる順にまずは個人で並べ，その後グループで共有をしたが，初めから揃うことはなく，グループで議論を重ね 1 つの結論を出した。さらに「ハグ」はどの段階の間に入るかとの問いに対しても意見が割れていた。そこで，再度議論を行い，人には様々な価値観があることに気づき，この価値観を擦り合わせる作業が人と人との付き合いには必要であることを強く感じている姿が見られた。

課題を自分ごととして捉え，随所に生徒同士で課題解決に向け協働的・能動的に活動する様子が伺え，他者と意見を出し合いながら試行錯誤している姿は，生徒 Agency の育成，発揮されたと言えるのではないだろうか。

今後の課題はこのような姿を教員がいかに見取り，評価し，それを生徒にフィードバックをすることができるか，さらにその力を生涯にわたって伸ばしていくことができるかを検討することである。それが生徒が生涯にわたって健康を保持増進する力に繋がると考える。

研究協議会

保健体育科（保健）「生徒の必要感を掻き立て、実生活に落とし込むための働きかけ・授業実践」

提 案 者　中田　雅皓
助言講師　文教大学教育学部　教授　山本　浩二

１．本校からの提案

保健授業での学びを、実生活に活かせるようになるためには、どのような働きかけや授業実践が必要なのか、「生徒 Agency」という視点から、「より良い授業」について検討する。

２．協議会における議論

この研究協議会では、教育の実践と理論について深く議論された。特に、「生徒 Agency」の育成とその必要性、社会と個人の相互作用、授業の実施方法とその経緯、そして授業の評価についての見解が交換された。

「生徒 Agency」の育成については、その必要性を認識しつつも、具体的な育成方法についてはまだ落とし込みきれていないとの意見が出された。また、社会と個人の相互作用については、授業の中でそれが実現できていたとの意見があった。授業の実施方法については、実験を選んだ経緯や、その実験が生徒に与える影響について議論された。特に、実験を通じて生徒にワクワク感を提供したいとの授業者からの意見や、実験の結果を深めるための時間が不足していたとの反省点が挙げられた。授業の評価については、1 時間目と 2 時間目の差や、OECD の提言に対する授業の意義について議論された。また、授業で必要な知識の程度や、中学生や高校生が性についてどの程度理解できるかという問題についても議論された。ICT の利用については、生徒が自分で調べることの重要性や、ICT を活用した授業の可能性について議論された。また、保護者とのコミュニケーションについては、保護者からの手紙を通じて親子間のコミュニケーションを促進する試みが紹介された。一方で、保護者の協力を得る際には、注意しなければならない点があることも確認された。最後に、助言講師からは、教材研究の重要性、エージェンシー育成の長期的な視点、そして健康情報リテラシーとヘルスコミュニケーションの必要性についての意見が提供された。

３．課題

研究協議会により得られた課題をまとめると、以下の 4 点が挙げられる。

1．生徒エージェンシーの育成：生徒エージェンシーを育てるための具体的な方法や戦略が必要で、それが教育の長期的な目標となるべきである。
2．ICT の利用：ICT の進歩に伴い、教育者は ICT をどのように活用し、それが教育にどのような影響を与えるかを理解する必要がある。
3．保護者とのコミュニケーション：保護者とのコミュニケーションは重要で、教育者は保護者との対話を通じて生徒の学習をサポートする方法を見つける必要がある。
4．健康情報リテラシーとヘルスコミュニケーション：生徒が健康情報を適切に理解し、それを活用する能力を育てることが重要である。また、全員が健康に関するコミュニケーションをとる時代になってきたため、ヘルスコミュニケーションの重要性も強調されている。

「生徒 Agency」とは、いかにして自分の身の回りや社会で起こっていることを「自分ごと」として捉え、どのように関与していくことができるか、という能力であると考えられる。発達段階によってその関与の仕方は異なり、社会人として直接的に社会問題の解決に寄与することが、最終的な「Agency」の形であると考えられる。今回、このような「Agency」を育成するためには、生徒と教師だけでなく、生徒と保護者、保護者と教師、さらには AI を含めた様々なステークホルダーとの協力が必要不可欠であり、それらを高校での 2 年間、ないしは中学から高校を含めた長期的な期間でカリキュラムに落とし込む必要性が示唆された。どのようなカリキュラムが必要であるか検討することが、今後の課題として残された。

公開研　公開授業Ⅰ・Ⅱ

芸術科（音楽Ⅰ）「太平洋の音楽に親しもう」

授業者　居城　勝彦

１．研究主題との関わり

さまざまな時代、地域の音楽を学習対象とする芸術科（音楽）では、活動を通して地球市民を育てることが可能であると考えている。ここでいう地球市民とは、以下の４つのイメージとして捉えている。

１．自己を育てた社会を理解し、自分を取り巻く社会の中でいかに生きるかの選択・決断ができる人。
２．他者の人権を認め、共生の哲学に基づいて行動できる人。
３．普遍的でグローバルな諸問題を自らの問題と考え、そして地球的視座に立って行動できる人。
４．総合的な教養を持つ人。

この４つのイメージは、本校が研究テーマとしている「生徒 Agency」に重なる部分が多いと考えている。

本実践では「自らが演奏した音楽（ウクレレによるハワイアン音楽の弾き歌い）からその成立背景に迫ること」を大事にしている。その理由は、鑑賞活動から始まるよりも、その音楽文化と学習者自身の距離が近くなるからである。このような学習過程を踏むことで、楽曲演奏を通してより自分ごととして音楽文化やその成立背景に向き合うことが可能であると考えている。

音楽の学習では、さまざまな地域の音楽文化を取り上げることが可能であるとしながら、なかなか題材として取り上げることがなかった地域があり、その１つに太平洋地域の音楽が挙げられる。本実践では、生徒にとって触れる可能性が高く、演奏を通して音楽文化やその周辺に触れられると考えられる太平洋地域の音楽として、ハワイアン音楽を取り上げ、ウクレレの演奏経験を通して音楽文化の成立背景に目を向ける実践を試みた。

授業づくりの視点として、

・生徒たちは身近に感じる地域だが、この地域（ハワイ）の史実を通史として知る機会がほぼない。
・ウクレレは生徒にも扱いやすく、手軽な楽器である。
・器楽として演奏するだけでなく、歌唱を伴う弾き歌いも可能である。
・器楽領域や歌唱領域から導入し、鑑賞を加えて思考し、演奏後に省察する学習過程は音楽科の学習における多くの領域をカバーできる。

という４点を考えた。

２．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

ウクレレという楽器を知ってはいるが、この活動で初めて触れた生徒がほとんどである。活動開始から「趣味・特技の欄に『ウクレレ弾き歌い』と書けるようになろう」を合言葉に演奏に取り組んでいる。これは、Agency を育むための条件「学びが楽しいこと」に相当する。

授業では、最初から細かな指示はせずに教科書の記述をもとに練習を始め、レパートリーが完成すると授業者の前で演奏し、合格するとスタンプをもらうという過程を繰り返している。その際、一緒に演奏したり演奏技術に合わせてハモってみたりもしている。一斉指導の時間を少なくしているのは、各自のペースで取り組むことを推奨したいからで、生涯教育の視点に立った楽器の演奏技術習得となることを意識しているからである。これは、Agency を育むための条件「学びが自分ごとであること」に相当する。

本時の調べ学習ではインターネット上の情報と書籍の情報を活用する。書籍に関しては、学校図書館司書に授業構想を話して、選書してもらった。各自の調べた情報は Jam board を活用して共有した。また、学習感想の一部も Jam board を活用して即時共有し、同じ考えの人や異なる考えの人がいることから自己肯定感の醸成や知的好奇心の喚起を図った。これは、Agency を育むための条件「価値観を変容させる機会があること」に相当する。

３．単元計画（全５時間）

第一次（３時間）ウクレレ弾き歌いのレパートリーを増やそう。

「Michael,Row the Boat Ashore」「真珠貝の歌」（母音唱版・英語版・ハワイ語版）

第二次（２時間）ハワイアン音楽の成立背景を調べ、考えてみよう。

４．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

本時の振り返りとして生徒が記述した内容を以下に記す。

・今までは真珠貝の歌を何も知らずに歌っていたが、今日の授業を聞いてこの曲の裏側にある歴史などを学んで、よく知ることができた。元々はポルトガルの楽器でも、ハワイに来て名前が変わっているし、発展したのはハワイだからハワイの楽器と言っていいと思った。最後に弾くときは、歌詞などを考えながら弾きたいなと思っていたけれど、とにかく最後まで弾くことに必死で、今までとあまり変化を出せなかった。

・ハワイの土地や歴史、音楽についてなどを調べてみて、今までは「ハワイの音楽」というとハワイ独自の要素、文化によってできたものであり、ウクレレもその一つだと思っていたけれど、移民や貿易などによる他国との繋がり・関係によってさまざまな要素が含まれた音楽が生まれたというのが感じられ面白かった。特に、ハワイは島なことが、音楽にも強く関係して現れているのかなと思った。また、授業で太平洋の国々を地図で見てみて、太平洋の国々と日本は意外と近いなと感じたとともに、近いのにこんなに雰囲気や言葉、文化などがちがい、音楽も違うことが興味深く感じた。

・ハワイの音楽はよく耳にするし、どこかゆったりしていて暖かい曲調がとても好きだけど、ハワイの歴史や、ハワイの音楽の歴史を知るのは今回が初めてで、海外のさまざまな文化が混ざり合って、さらに新たな文化が生まれていることが興味深かった。そのような文化や、歌の意味、歌詞の意味を知った上で演奏すると、よりそれぞれの音や歌詞に気持ちをこめて演奏ができるようになったように感じる。

・今まではハワイ語の意味がわからず、最初にハミングで歌っている時とあまり歌い方が変わらなかったが、意味を知ることでどこを大切に歌えばいいかを分かりながら歌うことができた。また、元は「真珠貝の歌」というイメージで歌っていたため、割とハワイ語もスケールが小さい感じで捉えていたが、思ったよりも壮大なイメージだったので、歌い方にも少し反映させられた。英語の自由な感じを出すのは難しかったが、実践できるよう、意識だけは持つことができた。

・真珠貝の歌を歌い、オセアニアの音楽はヨーロッパのような合唱とはちょっと違って自由らしさが時折感じられて、現地の人々の人間性が垣間見れて興味深かった。もしかすると、ハワイの歴史が多民族によって成り立っていたからかもしれないと考えた。ウクレレと一口で言っても様々な顔を持つ楽器だと今日の２時間で思ったため、更にウクレレの技術を向上していきたい

生徒たちはウクレレ弾き歌いに関心を持ち、積極的に練習を続けていた。レパートリーが増える中で演奏の練習に集中して取り組むようになり、曲の成立背景や他のハワイアンソングに関心を向けることはなかった。そのような状況で迎えた本時である。ウクレレやハワイについて調べて情報共有すること、ハワイ語と英語の演奏を比較聴取することを通して、生徒自身の中での楽曲やウクレレという楽器に対する意識の変容があったことが記述から読み取れる。意識の変容が演奏に対する姿勢や気持ちの向け方に影響はしているが、それらが即演奏される音や音楽に醸し出されているわけではない。その自覚が生徒自身にもあることがわかる。演奏表現に十分に表されるまでには、さらに時間が必要であろう。生徒の中には、さらなるディスカッションや調べ学習が必要になる者もいるだろう。ここからは、授業内の学習活動ではなく、各自の音楽活動に委ねたい。仲間とともに奏でる音楽の授業は、生徒の変容の入り口で十分だろう。教師は生徒にとってきっかけとなる共通課題の設定をし、さらなる追究をする生徒が手助けを必要とした時に、ともに演奏したり資料を提示したりすることで、生徒と音楽との距離を近づけるための方策を講じる役割を担うべきだろう。

高等学校芸術科音楽では、生徒自身が音楽文化とどう接するかを大事にしたい。今、目の前にある音楽は、ここにいたるまでに人々の営みの中で大事にされたり、変容をしたりしていることを意識してほしい。本実践もそこに気づく実践の１つとなっているであろう。

研究協議会

芸術（音楽Ⅰ）「音楽の活動を通して地球市民を育てるために必要な視点とは何かを考える」

提 案 者　居城　勝彦
助言講師　中山　京子（帝京大学）

１．本校からの提案

さまざまな時代、地域の音楽を学習対象とする芸術科（音楽）では、活動を通して地球市民を育てることが可能であると考えている。これまで、本校芸術科（音楽）では、労働力として連れてこられた奴隷たちによるアフリカの音楽文化がスピリチュアル（霊歌）やゴスペル、サンバ、カポエイラとしてそれぞれの地域の音楽文化となっていることを教材化してきた。また、ヨーロッパの作曲家たちが魅力的に感じたロマの音楽を自身の作品に音楽的要素として取り入れたことも教材化した。生徒たちが学習で触れた音楽文化の成立背景や音楽的要素を比較したり、他の音楽文化と関連させて考えたりしやすいカリキュラムマネージメントを行い、地球市民を育てようとしてきた。

今回の音楽Ⅰの実践では、太平洋地域の中からハワイの音楽文化を取り上げた。その理由は「教育において日本が環太平洋の国家であり、太平洋資源に大きく依存し、歴史的な関わりを持ってきたことは強調されない。これは戦後の民主主義教育における戦争への反省もあり、「南洋」統治や太平洋侵攻の歴史に触れられることは、ほとんどなく、日本の児童生徒及び教師の「太平洋」意識や歴史認識､社会的なまなざしの欠如がおこっていると考えられる。一方、観光産業では日本人旅行客の誘致は盛んであり、「南国の楽園」「島人の笑顔」のステレオタイプが増強されてきた。」という中山の指摘[1]に依拠している。音楽の学習としては、ウクレレによるハワイアン音楽の弾き歌い経験を通して自分を取り巻く社会におけるハワイアン音楽を考えることや、ハワイアン音楽の辿った歴史を関わった人々の視点から考えることを通して、ハワイアン音楽に内在する諸問題を自らの問題としても考えることを目指している。一連の学習を通して、生涯に渡り触れていくさまざまな音楽に対してヒトの移動や人々の営みにも思いを馳せることができる、地球市民としての視点を持った生徒が育つのではないかと考える。

２．協議会における議論

器楽領域において、ウクレレを扱う授業実践がまだ少ないことが冒頭で確認された。本実践ではウクレレを使って弾き歌いをすることから始まり、成立背景に迫るという学習過程を踏んだことにより、知識理解だけに偏ることのない活動が展開されていると評価された。これは、授業者が高等学校での音楽の授業を学校教育の出口であり、生涯学習の入口であると捉えて学習過程を構想しているからである。つまり、高校卒業後の生徒たちが新たな音楽とつながり、自分の音楽経験として深めていくときの１つのモデルを学習活動の流れとして経験できるように意図しているということである。

生徒の活動評価に関しては、３つの観点・７つの視座をもとにルーブリックを作成した。参加者からは、本時の活動で生徒 Agency を含み、すべての項目を評価することが可能なのかとの意見があった。授業者は、単元を通してのルーブリックを意識して作成をしている。特に生徒 Agency については、本活動全体を通して培われるものであり、本時だけでの変容で評価できるものではないというのが授業者の考えである。

３．課題

「生徒エージェンシー」と「音楽科」の学習を並べると、「責任（responsibility）」という部分で、「音楽科」との相性に違和感を持つ参加者もいた。授業者も生徒の自由な表現が認められるべき芸術で「責任」という言葉が活動を制限してしまうのではないかとも考えた。現状では、これまで同様「地球市民育成」というキーワードを再認識してカリキュラムをマネジメントすることで、自分と音楽・自分の音楽と他者の音楽を捉えることが可能となり、このような活動の積み重ねの中で、自分とさまざまな音楽文化との適切な距離の取り方を思考／試行していくことが大事なのではないかと考えている。そのためには、今、ともに学んでいる生徒たちにとって、学習活動として魅力的な音楽文化の教材研究が必要である。

---

[1] 中山京子（2022）「ポストコロニアル時代における環太平洋意識の育成－連帯性を養う教材開発に向けて－」日本国際理解教育学会第 31 回大会自由研究発表。

公開研　公開授業Ⅰ・Ⅱ

芸術（工芸Ⅰ）「人々の生活を心豊かに演出する～キャンドルスタンドの制作～」

授業者　神田　春菜

１．研究主題との関わり

「Agency」における主体性は，積極的に取り組むだけではなく，責任を持って社会に関わる姿勢があるかが重要である。「A 表現⑵社会と工芸」では使い手や社会的な視点から考え，制作することを目標としている。この目標は，「生徒 Agency」の育成に重なっていると考える。

今回の題材では，安全性や使いやすさなどの機能面と，使い手の心情や願いなどの情緒面の２つの側面から条件を整理し，使い手の心が豊かになる造形とは何かを考えていく。使い手の立場から考えるには，自分の作品を客観的に見つめていく必要がある。一方で，生徒にとって客観的な視点から自分の作品を捉えていく機会は少ないと思われる。そのため，本授業ではお互いのアイデアを批評する活動を取り入れることで，その機会を創出し，生徒の「価値観を変容させる機会」としたい。

２．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

本題材では，キャンドルスタンドを使用する人や場面を具体的に設定し，造形の条件を考え，条件に合わせた構想をすることが学習の中心となる。そのため，仕上がった作品のみではなく，発想や構想段階のアイデアをまとめたワークシートと毎授業の振り返りであるポートフォリオを重視した。また，今年度は中間分析会として，必ず１回は試作するとともに，お互いのアイデアについて試作を見ながら批評し合う時間を設けた。分析会の前後での変化を見取り評価できるよう，改善した部分をワークシートに記録することや，試作の変化を記録することで，学習の深まりを判断した。

３．単元計画

授業は全 24 回として，表現と鑑賞の活動を組み合わせて展開した。

次	学習のねらい	主な学習活動	評価（評価物）
1	社会的な視点から工芸作品を見つめ直す	1　やきものやその技法の魅力に触れる 2　社会的な視点からキャンドルスタンドを分析する	知，鑑，態鑑（ワークシート，ポートフォリオ，授業の取り組みの様子）
2	人々の生活を心豊かに演出するキャンドルスタンドを発想し構想する	1　使う人や使う場面を考えアイデアを出し，作品に求められる機能や造形を考える 2　油土や工作用紙で試作し，ルーブリック表を基にお互いの作品を批評し合い，改善する 3　作品や三面図を作成して制作の計画を立てる	知，発，態表（ワークシート，三面図，試作品，ポートフォリオ，授業の取り組みの様子）
3	各自の計画に基づいて制作する	1　各自の計画に合わせ作品を制作する（成形→乾燥→素焼き→施釉→本焼き）	知，技，発，態表（作品（途中経過含む），ポートフォリオ，授業の取り組みの様子）
4	お互いの作品を評価し合いながら鑑賞し，見方や感じ方を深める	1　使い手の視点から作品を制作することができたか実際に使用しながらルーブリック表を使用し評価し合う	知，鑑，態鑑（相互評価シート，ポートフォリオ，授業の取り組みの様子）

※知 =「知識・技能」の知識に関する評価規準，技 =「知識・技能」の技能に関する評価規準，発＝「思考・判断・表現」の発想や構想に関する評価規準，鑑＝「思考・判断・表現」の鑑賞に関する評価規準，態表＝表現の「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価規準，態鑑＝鑑賞の「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価規準を表す。

４．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

公開授業で行った中間分析会に焦点を当て「生徒 Agency」の育成について振り返りたい。中間分析会は，考えたキャ

ンドルスタンドのアイデアが使う人や場面に合わせたものになっているのかを批評する機会として設定した。分析会の流れは以下の通りである。

1　今回の題材の目標と批評の観点を確認する
2　それぞれが考えたキャンドルスタンドのアイデアについて試作品を提示しながら説明する
3　説明を踏まえて，批評シートに意見をまとめる
4　全員のアイデアを分析し終わったら批評シートを渡す
5　それぞれからの指摘を踏まえ，まとめているアイデアに改善点を赤ペンで書き加え，試作品の再制作やデザインの再考を行う

批評の際は，作品を褒めるだけで終わったり，批判するだけになったりすることがないよう多角的に見ることと，なぜそう思ったのかという理由を具体的に書くことを強調した。また，批評シートに書くだけではなく，直接話し合いながら良い点や改善点を取り上げても良いと伝えた。では，実際に中間分析会を通して，生徒のアイデアがどのように変化したかを見ていく。

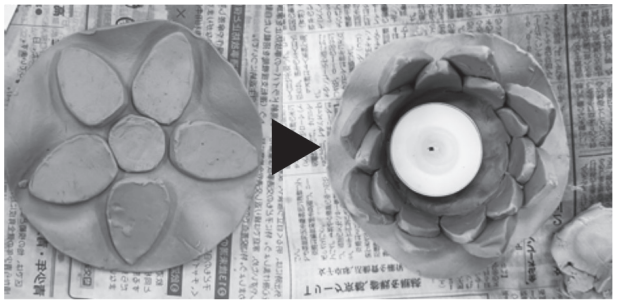

図1 生徒Aの試作品（左：中間分析会前，右：中間分析会後）

生徒は分析会を通して，多くの場合，指摘をされた部分を踏まえて何かしらの変更点を加えている。例えば，生徒Aは自分自身ではイメージに沿ったかたちに作っていたが，他の生徒からは使う人や場面を想定しているようには見えないという指摘を受けていた。それらを踏まえ，使用場面についてセラピーなど心を清らかにする場面とし，モチーフとした蓮の特徴が生きる造形に変更した。分析会を通して具体的に使われる姿を想像することの大切さを実感していた（図1）。また，生徒Bは使う人が楽しい気持ちになるような，人をモチーフとしたキャンドルスタンドを考えていたが，使用時にキャンドルが落ちそうで不安定ではないかという指摘を受け，元々のコンセプトは維持しつつ，より安全に使えるデザインに変更した（図2）。より良いデザインにするための工夫を粘り強く考えることができていた。ここでは，2つしか紹介できなかったが，多くの生徒が中間分析会を通して改善点が具体的になっており，その後のデザイン再検討に積極的に取り組むことができていた。

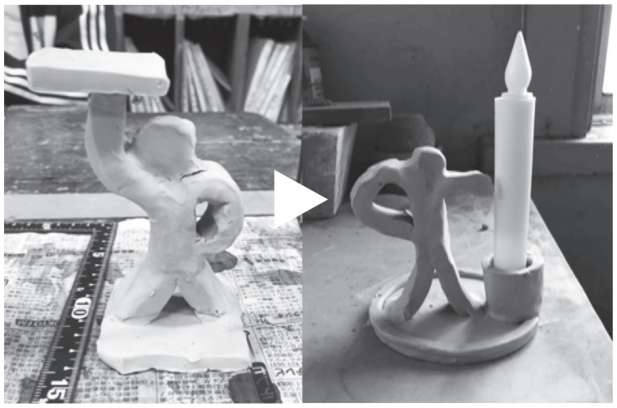

図2 生徒Bの試作品（左：中間分析会前，右：中間分析会後）

一方で，すべてのアドバイスを取り入れているわけではなく，事例で紹介した生徒のように，もらった意見を咀嚼した上で反映させることができている生徒が多かった。想定した以上に，良い面も改善点もお互いに伝え合うことができていた。また，中間分析会での気づきはポートフォリオの中で多くの生徒が触れており，生徒にとっても中間分析会は印象的な活動であったことがうかがえた。中間分析会を通して，題材のねらいをより意識できるようになっていったと言えるだろう。授業の導入の段階から，毎授業の中で目標を確認するとともに，ねらいから自分の作品を客観的に見返す機会を定期的に取り入れることは効果的であるということがわかった。改めて，何を目指して制作するかを意識させることの重要性を実感した。

では，実際に「生徒 Agency」の育成につながっていると言えるかは，五分五分な印象である。中間分析会は制作を自分事として捉え，モチベーションを高めていくことにつながっているため，その点ではねらいに対して主体的に取り組むために必要な活動であるといえる。一方で，「社会的に責任を持って」となると，そもそもの題材設定を学校の外や第三者と実際につながるようなものにしないと難しいのではないかと感じ，協議会の中でも話題として上がった。何かしらのプロジェクトに取り組む，という授業に発展させないとこれ以上の新たな変化は生まれない可能性が高い。ただし，生徒主体となるプロジェクト型学習は，ただプロジェクトに取り組ませればいいものでもなく，イベント的なもので終わってしまう場合も多いという指摘もあった。生徒にとって切実性のあるものとして展開していけるよう，どのような題材や方法がこれからの授業では効果的なのか引き続き検討していきたい。

研究協議会

芸術（美術工芸）「生徒 Agency 育成の観点から美術，工芸の教育に求められる学びを捉え直す」

提 案 者　　神田　春菜
助言講師　　横田　　学

１．本校からの提案

芸術分野の教育における「Agency」の育成では，「自己との対話」がキーワードとなる。表現の活動であれ，鑑賞の活動であれ，他者の決めた尺度ではなく，自分の価値観で判断していくことが大切である。そして，自己の価値観が確立されることで自分の選択に責任を持つことができると考える。一方で，自分の表現や感じ方に自信のない生徒も多いように感じる。自信がなければ責任感も生まれにくい。そのため，自己と向き合う場面を工夫することが，芸術の授業の中での「生徒 Agency」育成の充実につながるのではないだろうか。

２．協議会における議論

協議会では，公開授業での生徒の取り組みの様子を踏まえて，「生徒 Agency」を育成するための手がかりを出していった。ここでは，芸術において「生徒 Agency」を育成する上でのヒントとなるような意見を箇条書きで載せておく。

- 本校の「生徒 Agency」の育成に必要な条件として「自己との対話」が取り上げられているが，特に芸術教科や表現において重要な点である。特に,「自己との対話」をベースにした「クリティカル･シンキング（批判的思考）」が，キーワードとなるのではないか。
- 作品を鑑賞したり，発想や構想をしたりするときに，それらの良さを自分の言葉や価値観で語ることができる力を身につけさせたい。芸術において言葉にする必要はないという意見もあるが，多くの生徒は作家になるわけではない。手で考え，言語化することが美術や工芸の教育の核であろう。
- 芸術は役立たないけど，役立つものである。芸術は自分や社会にとってどのような価値があるのかを，考えることができるよう授業を展開する必要があるだろう。
- 社会科の中で起業家教育や PBL の授業を行っているが，今回の授業のように使い手を癒したい，という視点から出発する生徒は少ない。科学や社会の分野で取り扱うプロジェクトと，芸術で取り扱うプロジェクトは思考が異なっているかもしれない。そこに可能性を感じる。
- 現在，世界中が議論を尽くしても解決できない課題に直面している。その時に言葉を超えて理解し合う手段として芸術は重要なのではないか。

３．課題

課題として，授業の題材，プロジェクトをどのように設定するかが大きな話題となった。現状の授業では，１人ひとりはテーマに沿って作品のアイデアを出しているが，共通した課題意識を持って取り組んでいるとは言い難く，お互いのアイデアに対しコメントをする際の共通認識に欠けている感が否めない。改善していくヒントとして，多くの意見をいただいた。

- 外部の人たちと連携し，具体的なプロジェクトを設定する。生徒自身がプロジェクトを設定し，自分事として関われるものにすると尚良い。
- 自分たちの取り組みに対し，批評の視点を持つためには，外部の意見や評価が必要である。
- 生徒同士でも交流する場やきっかけを意図的に作ることで，安心感が生まれる。また，他者からの評価が楽しさにもつながっていく。毎時間の１分で十分なので，自分が今取り組んでいることを話せる時間を作ると良い。その際，聞き手は話し手が１分話せるよう，質問をしながら聞くようにルールを設けると交流が円滑になる。

「Agency」は言われて課題に取り組む授業スタイル，つまりトップダウンでは育たない力であるという意見が出てきた。一方で生徒に任せっぱなしでは育たず，教師がリードしていく場面も必要である。現状の授業のあり方では，変えていくことが難しく,根本的に授業やカリキュラムのあり方を見直す必要があるのではないか。変えていくには，入試などの場面で，何を学んできたかということが，もっと評価されるようにならないと難しい部分もあるのだろう。教科だけではなく，学校全体，教育界全体で考えていかなければならない課題でもあるとの意見も出た。

公開研　公開授業Ⅰ・Ⅱ

芸術（書道Ⅰ）『臨書から倣書、創作へ―「蜀素帖」を学ぶ』

授 業 者　荒井　一浩
助言講師　角田　健一

１．研究主題との関わり

Agency のキーワードを抜き出すと、「変化」「目標」「振り返り」「責任」が挙げられる。生徒 Agency を育成するために書道では何ができるのかを模索し、古典を踏まえた表現を如何に変容させ、自らの意図に即した表現に近づけていくことができるのかを学習活動の中心に据えることとした。また、振り返りや他者の意見を取り入れることを積極的に取り入れることも考えて授業を構想した。一方、「責任」に関してはその内実を把握するに至っていない。主体性と言ってもやりたいことをやっているだけでは不十分であることは理解されるが、「責任を持って行動する能力」とは具体的にどのようなことを指し示し、授業の中でどのように落とし込んでいくことができるのであろうか。他者の評価を受け止めることまでは理解が及んでいるが、その後の展開は見えていない。

２. 評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

本授業においては、意図に基づいた作品制作がパフォーマンス課題となる。

用具・用材に関して得られた知識や技能を活用し、自らの作品の充実を目指して課題を発見、解決を図る過程を丹念に評価することに配慮した。以下に作成したルーブリックを掲出する。

育成する資質・能力		3	2	1
観点	持つべき視座			
知識・技能	基本的な知識・技能の習得	用具・用材の特徴を的確に理解し、表現性豊かに活用することができる	用具・用材の特徴を理解し、活用することができる	用具・用材の理解や活用の仕方に課題が見出せる
思考・判断・表現	課題を発見する力	自らの意図と表現の相違を根拠を踏まえて感得できる	自らの意図と表現の相違を感得できる	自らの意図と表現の相違を明確に意識できていない
	論理的思考をもって問題を解決する力	自らの表現を意図に沿って変化させ、その表現効果を感得できる	自らの表現を意図に沿って変化させることができる	自らの表現を意図に沿って変化させることが不十分である
	自らの主張や考えを表現する力	自らの表現を根拠を明示して言語化し、表現することができる	自らの表現を言語化して表現することができる	自らの表現と言語化の関係が不明確である
主体的に学習に取り組む態度	問題解決に向けて粘り強く取り組む姿勢	自ら意図した表現に近づくために継続的に試行をすることができる	自ら意図した表現に近づくために試行することができる	自ら意図した表現に近づくための試行が不十分である
	問題解決に向けて他者と協働できる力	他者の作品を根拠を示して評価したり、他者の意見を自らの考えと照射して取り入れたりすることができる	他者の作品を評価したり、他者の意見を取り入れたりすることができる	他者の作品を評価したり、他者の意見を取り入れたりすることが不十分である

3. 単元計画

本単元は10時間で構成した。

	学習のねらい	主な学習活動
1-2	単元の目標を把握し、学習の見通しを持つ	蜀素帖を知り、学習計画書を作成する 蜀素帖「青松」を臨書し、書風を捉える
3-4	古典をより深く知り、言語化する	美術館の活動を踏まえて、蜀素帖のキャプションを作成する
5-6	古典から言葉を紡ぎ、臨書から倣書へと展開する	蜀素帖から書きたい言葉を集字し、臨書する 表現の意図を明確にし、倣書に取り組む
7-8 （本時）	用具・用材と表現の関係を捉え、意図に基づく制作を行う	ダルマ筆を用いて倣書作品（半切1/2）を制作する 制作ノートを手がかりに自己評価を行う
9-10	鑑賞を通して表現の多様性を学び、学習を深める	全員の作品を相互に鑑賞しあう 鑑賞文を作成する

4. 評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

本単元は、臨書から創作への足がかりとして従前より設定しているものであるが、生徒Agencyの育成という大会テーマに即して自己の取り組んでいる作品をよりよく変容させていくために自ら課題を明確化し、自己評価や相互評価を積極的に働きかけることを強調して、学習活動を展開することを目指した。もちろん、Agencyを育むことによって実現しようとしているもの、つまり自分が所属する集団や社会がより良い状態、Well-beingに近づいていくためには外への働きかけが不可欠であることは十分理解しているつもりであるが、現状、授業者の取り組みの中ではそこまで至ってはいない。「自分の作品を意図に即したものに近づける」という学習の方向性が、内向きであるという批判は免れない。しかし、書道という科目の、あるいは芸術全般に言えることではないかと考えるが、自己表出という行為が自己との対話、自分自身を見つめるという活動から端を発するということもまた確かなことではないだろうか。とすれば、自己を見つめるという内向きと捉えられる作品制作における自己変容を経て、それを外に向けて発信するという学習活動を用意しなければ、真の生徒Agencyの育成は叶わないのではないかと考えられる。今後の課題として考えていかなければならないのではと感じる。（荒井）

倣書や創作は、実際にはその対象とする古典のバックグラウンドの理解、そして技法や特徴の十分な理解が必要となる。加えて自己の表現という書の本質へ踏み出す重要な単元でもある。その中で単元の事前計画が緻密であり、特に扱う古典『蜀素帖』のキャプション作りという「深く知り、言語化する」だけでなくキャプションの意味するところの「多くの人が目にするであろうもの」を「発信する（伝える）」という自身の責任を内在的に学んだ上で、本授業への準備がなされている点は特筆すべきである。本時では、「草稿」を基に「倣書」そして自身の「ねらいの表現」つまり創作に近い形で進められているが、実作の導入時では特に日常よりも大きいサイズの筆、紙を用いる点において、特に注意が払われていたように思われる。生徒たちが「腕を大きく動かすこと」「視点を高く持つこと（膝立ち）」を実際に行い、半紙サイズでは主に「肘から先の運動」から「体全体の運動」への変化を感じ取ることが出来ていた。実際に最も太い線・細い線を書くこと、仙厓「一円相画賛」「○△□」の鑑賞を通して書の精神性にも触れながら、「○」を書くことで筆のねじれへの意識も向けられている。このことから実際に半切1/2サイズの試書に入っても臆することなく制作している生徒が多く目に留まった。生徒同士の意見交換、そして教員側からの「表現のねらい」の働きかけを通して、通常迷いが生じやすい制作の方向性を明確にしていく工夫も見られた。生徒への指導は体の動きを通して説明する形が間々見られ、上述の「腕を大きく動かすこと」への重要性をわかりやすく指摘する。本時では倣書や創作において重要な事柄として「毛筆の機能」「変化と調和」の2点について板書・説明があった。殊に「調和」は生徒には理解が難しいものである。文字の字形や大小・太細・遅速など多角的な視点から具体性を示すことも肝要だが、一方で一度にこれらの理解は困難である。一部でも「調和」の具体的な尺度を用いることや、本単元内の臨書で触れた特徴の振り返りなどによって今後対応できるのではないかと考える。（角田）

5. 引用文献

2030年に向けた生徒エージェンシー（Student Agency for 2030 仮訳）

研究協議会

芸術（書道Ⅰ）「生徒 Agency の育成と書道教育」

提 案 者　荒井　一浩
助言講師　角田　健一

１．本校からの提案

OECD で 2015 年から進められる Education 2030 プロジェクトの取り組みの中で示された Agency は「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」と訳される。この訳語を目にして、初めに連想したのはヨーゼフ･ボイスだった。そして､2011 年に書かれた｢絆｣の文字を思い浮かべた。しかし､それらは日々の書道の授業とは隔絶したものと感じられた。結果、今回の提案は自らが属する集団や社会の変容を目指すものではなく、自己の作品をよりよく意図に即した表現に近づけていくという自己の変容に終始したものとなってしまった。

２．協議会における議論

２−１　公開授業を踏まえて

公開授業を実際に受講した生徒の言葉を記録しておこう。

「作品本来の良さを生かしながらも、自分の想いを込めるために調和を意識することが難しかった。私は「風花」という言葉を選び、花びらのように雪がちらちらと舞う様子を思い浮かべて創作した。「風」はやわらかく吹く様子を表現するために角を少なく、「花」は全体的に細くし儚さを表しながらも始筆を太くすることでメリハリをつけた。また、キャプション作りでは作品を俯瞰して見ながら自分の言葉で表現できたことが楽しかった。」

この言葉からはある程度の充実感を受け取ることができる。倣書から創作へと向かう道筋で自らの意図を持って工夫し、目指す表現に向かっていることは読み取れる。しかし、当然のことながら他者への意識を感じる言葉はない。

２−２　生徒 Agency に焦点をあてて

生徒 Agency の育成に関しては「責任を持つ」ということの意味と授業での扱いが話題となった。「責任」を「当事者意識」として捉えて、本単元の前段で実施したキャプション作成や作品制作の中途段階で行った相互評価、終局に用意された鑑賞活動等が関連性を持ちうるのではないかという指摘があった。

３．課題

作品は制作者の元を離れた時点で一人歩きを始める。作品の鑑賞者は自由にその作品を読み解く権利を有しており、それは制作者の意図に左右されない。つまり、制作者は鑑賞者の心の動きを統制することは叶わないということである。その中での責任の持ち方をどのように考えたら良いのであろうか。「責任」ということがよく指摘されるように「当事者意識を持つ」ということに重なるのであれば、制作者と鑑賞者の意識の共有が考えられるだろう。学習者を制作者であるとともによき鑑賞者として導くことができれば少しは研究主題に近づくことができるかもしれない。本単元においても最後には鑑賞活動と鑑賞文の作成を課しているが、それを持って十全とは到底思えない。批判を覚悟であえて言えば、生徒 Agency の育成を教科や科目に委ね、成果を求めるのには違和感を感じる。教育活動全体を俯瞰し、生徒 Agency の育成に効果的と考えられる活動を充実させていくという視点を持っても良いのではないだろうか。（荒井）

本単元では Agency における「変化」を、臨書から創作への取り組みに落とし込む。「自分で目標を設定」することは本時における「表現のねらい」であり、「振り返り」は自身の作品を見つめ、課題を探す。そして他の生徒への作品を鑑賞し､鑑賞対象となる作品の｢ねらい｣を確認･アドバイスする。ここまで Agency との関連性は極めて高い。一方で Agency の概念における課題は｢責任｣という点をどのように扱うべきかが焦点となった。Agency の概念は｢主体性｣に加えて「責任」の意識が重視されているために、これが重要な位置付けであるには違いないが、書道の「責任」ひいては芸術の「責任」とは一体何を指すのかが協議でも焦点となった。ゲルニカやバンクシーなどの話題も上がったが、Agency のいう「責任」が「応答責任」とすれば、自他の作品に無関心でいるのではなく、常に意思・意見を持ち、高め合うための目標（ねらい）を常に意識すること。これが「責任」の一部とも考えられる。本時授業でも十分に行われたことだが、「鑑賞」の分野を工夫・発展させていくことが一つの端緒となりうるかもしれない。またこれには芸術科におけるベース（実技）ならではの難しさも内在している。今後さらなる協議を重ね「責任」の扱いについてより明確にすべきだろう。（角田）

公開研　公開授業Ⅱ

家庭科（家庭基礎）「対象を意識した『金融教育』の授業を考える」

授業者　桒原　智美

１．研究主題との関わり

本校が目指す教育に繋がる生徒 Agency の育成について：

2023 年度金融教育の授業として、対象年齢を意識した授業を自分で考案する授業を試みた。2019 年度実施の「災害を意識した授業を考える」授業で実践した、誰かに伝える、ことを目標としてまとめていく方法を踏襲し高校生が学習指導案を考える授業である。2020 年度「コロナ禍、SDGs を意識した食の授業を考える」、2022 年度「金融教育を考える」と実施している。授業者という立場を意識することで、人にわかりやすく伝えるために、正しく深い知識が必要であることを実感し、自分が伝えたいことが伝わるようにするためには、どのようにすると効果的であり、どこを強調すれば伝わるのか、１人１分間のパワーポイントを作成し、発信を意識した授業展開としている。実際の授業や活動を想定し、繋げる授業を工夫することが「生徒 Agency の育成」になると考える。家庭科は、長い人生の中で自分の人生を考え、世の中の具体的な流れを捉える役割があると考え、自分の人生や生活に活かすことで同時に世の中のことを考える力となり得る。その具体的な一つの「お金」を扱うことでより身近なものになっていく。具体的なものを求めるのであれば、学生にできることは制約があるが、自分の生活を通じての生徒 Agency に育成に関わる取り組みとその改善に繋がると考える。

２．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

育成する資質・能力		4	3	2	1
観点	持つべき視座				
知識・技能	基本的な知識・技能の習得	金融や投資について大変理解している。	金融や投資について理解している。	金融や投資について少し理解している。	金融や投資について理解していない。
思考・判断・表現	課題を発見する力	対象年齢にとっての金融教育の必要事項をタイムラインの視点で理解している。	対象年齢にとっての金融教育の必要事項を理解している。	対象年齢にとっての金融教育の必要事項の理解が浅いため、問題点が曖昧になっている。	対象年齢にとっての金融教育の必要事項を理解していないため、問題点が発見できない。
	論理的思考をもって問題を解決する力	金融教育についての多面的な情報を得て、指導案作品作りができる。	金融教育についての情報を得て、指導案作品作りができる。	金融教育について指導案作品作りができる。	金融教育について適切な情報を得ることができない。
	自らの主張や考えを表現する力	わかりやすい音声 PP 作品ができる。客観的な相互評価ソフトの得点が高い。	ほぼわかりやすい音声 PP 作品ができる。客観的な相互評価ソフトの得点が中程度である。	まあわかりやすい音声 PP 作品ができる。客観的な相互評価ソフトの得点が中程より低い。	わかりやすい音声 PP 作品ができない。客観的な相互評価ソフトの得点がかなり低い。

主体的に学習に取り組む態度	問題解決に向けて粘り強く取り組む姿勢	対象を意識した『金融教育』の授業を考え、指導案を粘り強く完成させることができる。	対象を意識した『金融教育』の授業を考え、指導案を完成させることができる。	対象を意識した『金融教育』の授業を考えるが、指導案を完成させることはできない。	対象を意識した『金融教育』の授業を考えることができず、指導案作りに取り組むことができない。
	問題解決に向けて他者と協働できる力	30 秒発表を聞き、自らも発表し情報を共有してより深く考えることができる。	30 秒発表を聞き、自らも発表し情報を共有して考えることができる。	30 秒発表を聞き、自らも発表し情報を共有できる。	30 秒発表において自ら発表できず、情報を共有できない。
	生徒 Agency	自ら考えた対象を意識した「金融教育」の授業を計画・努力して、実際に対象の前で授業ができる。	自ら考えた対象を意識した「金融教育」の授業実施に向けて計画・努力ができる。	自ら考えた対象を意識した「金融教育」の授業実施を計画まで具体的に考えることができる。	自ら考えた対象を意識した「金融教育」の授業の実施への意欲がない。

3．⑴単元計画

・消費者教育 4 コマ漫画飯田橋劇場（フォーム入力）、先輩の授業を知ろう（動画）、東京都消費者センター動画（SNS 関連）視聴　（事前課題および 1 時間目）

・対象や評価の観点を意識して、どのような授業にするか考えよう。　（2 時間目）

・30 秒発表を聞き、情報を共有してより深く考えよう。　（3 時間目）

・音声入りの 60 秒発表動画を作ろう。　（4 時間目）

・授業の流れの発表を聞き、授業をイメージし、アンケートツール入力から金融や投資について自分ごととして考えよう。　（5 時間目）

・発表を振り返り、知識の共有をし相互評価の結果から金融や投資について考えを更に深めよう。（6 時間目・本時）

⑵本時の学習（6/6 時間目）

①本時のねらい

金融教育についての多くの情報を得て、対象や評価の観点を意識して「『金融教育』の授業を考える」ことができる。発表により情報を共有し、相互評価から「金融教育」に関する考えを深めることができる。

①本時の授業の流れ

導入 10 分→発表 20 分→まとめ 10 分

4．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

ワールドカフェの精神で、「否定しない、新しいアイディア、共有、全員に、自由に、いつもと違う雰囲気で、多くの知恵や考え、認識を深める、新たな気づき、相互理解、関係性の質を高める。」ことを生徒に伝えておくことで、クラスの他の生徒の作品を見ながら、匿名性を高めた相互評価を実施することが可能になったと考える。自分だけでない他者との関連を意識する機会になったと考える。教師がプロジェクター、PC を準備して Google ホームやメールからの作品を映すことや、生徒に VISITS forms ソフトの URL、アドレス、パスワードの確認をして、相互評価を開始させることをさらに簡便に行うことが、授業運営上の課題と考える。

5．参考文献

文部科学省中央教育審議会「新しい時代の高等学校の在り方ワーキンググループ」資料

研究協議会

家庭科（家庭基礎）「教育現場の『金融教育』は、どのように実施していきますか？」

提案者　桒原　智美
助言講師　中村　香織（東京都スタートアップ・国際金融都市戦略室戦略推進部）
宇根　尚秀（元ゆうちょ銀行常務執行役員、インベストメントLab代表）

１．本校からの提案

新しい高等学校 学習指導要領が告示され、実施されています。家庭基礎では「持続可能な社会を目指して主体的に行動できるよう、安全で安心な生活と消費について考察」することが掲げられ、投資関連の要素が入ってきています。メディアなど多くの場面でも家庭科で「金融教育」実施、と耳にします。現場の教員は良質で専門的な、わかりやすい教材を手に入れたい、自分の学校の状況に合う教材は、どれなのだろうか、と探しています。金融関連の業界、協会からも多くの教材や資料が提供されています。しかし、家庭科の授業時数や年間計画の狭間で、現場の教員は迷いも多いのが現実です。専門的でかつ良質な教材を提供しよう、将来のある子どもたちの役に立ちたいと考え、生徒たちに使ってもらえる教材の作成を新しく試みられている専門家や金融関連の団体も数多くあります。教育現場の自分の学校の「金融教育」どのように実施していきますか？ということをテーマに教育現場、公共の立場、投資専門家それぞれの立場から困りごとを探っていきましょう！ということで、本校の今回の授業である、「1分動画の生徒作品の制作後、オンライン『評価』機能を活用し、共感をもって受け入れられた発表や生徒間の評価能力の出力を可能としたいと考える授業」をきっかけに、それぞれの立場、現場の困りごとや、授業実施のポイントを明らかにしていくことを提案します。金融教育を型だけでなく、真に生徒の将来の人生設計を考える時のリテラシーの一つとして、自然に取り入れられる存在にしていくためのスタート地点と考えます。金融教育はあくまでも「消費者教育の延長線上にある、自分のライフスタイルを考えるための自分が選び取る材料の一つ」と考えます。そして低金利時代の現在は、その現実を学ぶことは大きな力になると考えます。

「金融リテラシーを高める」視点から①金融庁副教材PPで学習　②あくまでも素材としての「FIRE」を事前課題として取り上げた投資専門家の授業を受け　③自分ごととして「金融教育の授業を生徒自身で考え、プレゼンする」という流れの授業での③の部分を授業公開しました。

２．協議会における議論

当日は、公立の普通科の高校、高等工科学校、他県の教育委員会金融教育研修会担当教員、国立教育学部家庭科の学生、来年度から公共を教えることになっている私立大学社会歴史科学生、元金融庁職員の大学教員、東京都の金融教育専門家、投資専門家、MBAを取得し外国の銀行に勤務していた経験もあり、など多種の立場の方からのお話が聞けました。現場教員からはどんなに良い教材であってもどのような環境にその生徒たちがいるかで教え方も、内容もセレクトしていく必要があることが出されました。今現在生徒にお給料の出ている高等工科学校の先生のお話は、あらゆる場面を考えて、現実的に教材を作成する必要があることなどを実感しました。また、来年度より高校教員になる学生からは自分が今後教えることになる教科との関連を今のうちに学びたい、という熱心な様子を拝見でき、今後の教育界にも期待が持てると思いました。「観点別評価の導入に向けた評価のあり方」については、どの学校でも苦労している、とのことでしたが、対象に関する理解を確実にしていくことが大切である、という意見が多くありました。

３．課題

生涯を見通した経済計画を立てるには、教育資金、住宅、老後の備え、事故や病気、リスクへの対応策、預貯金、民間保険、株式、債券、投資信託等の基本的な金融商品の特徴（メリット、デメリット）、資産形成の視点にも触れながら、生涯を見通した経済計画の重要性について理解できるように、とされています。教員、保護者他、多くの方と金融教育の情報を共有し、家庭科としての金融教育のあり方を考えながら実践を重ねること、そして今回、授業中の生徒発表に関して匿名性を高めた相互評価を実施するために使用したVISITS formsソフトのような「活用できるICT関連の要素」を取り入れ、効率よく効果のある授業を考え、教員の負担感を減らしていくことも課題と考えます。

参考：（金融庁作成の指導教材PP）https://www.fsa.go.jp/news/r3/sonota/20220317/20220317.html

公開研　公開授業Ⅱ

外国語（英語コミュニケーションⅠ）「主体的な学びを促す授業実践の考察」

授業者　加藤　淳

１．研究主題との関わり

本授業の課題は，英語の授業実践における生徒の主体性を養うことである。言語習得には，他者から強いられる学習ではなく，生徒が自ら課題を設定し，学び，学習を管理する自発的な学習が必要である。このような主体的な学びを促すためには，生徒が自分ごととして学びを捉える必要があり，そのために題材が生徒に直接影響するか，生徒自身の経験に関連する必要がある。また，知的葛藤に訴える方法も一つの手段であり，関連するトピックで生徒の関心を引き込み，発問とやり取りを通じて学びを深めることが重要である。最後に，英語で学びを深める際には，適切な指示と発問，そして的確なフィードバックが，生徒がエージェンシーとなった主体的な学びを支援するために不可欠である。

２．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

⑴知識と技能

ａ. 正確で適切な英語の使用に努める。

ｂ. 語彙力・文法力を身につける。

⑵思考力・判断力・表現力

ａ. アラスカでのクジラ漁や星野さんの気持ちを理解する。

ｂ. 自分の意見を相手に伝え，相手の意見を聞こうとする。

⑶主体的に学ぶ態度

ａ. 活動（ペアワーク）を積極的・自発的に行う。

ｂ. 自分の言葉で表現し，理解しようとする。

３．単元計画

身の回りのことが題材になっていた一学期を経て，二学期は最新科学技術（スマートフォンと AI）と動物・環境保護，そして平和について考察する題材を扱ってきた。これらの題材を通じて，「自分対外界」という視点で言語活動に取り組んできた。今単元では，星野道夫氏とアラスカについて理解を深める点では「自分対外界」という視点は変わらないが，星野氏が言う「遠い自然」という概念を通じて，生徒は「自分対内面」の対話を重ね，その成果をアウトプットにつなげていく。

自然写真家星野道夫が生きた時代は，現在の高校生にはイメージが湧きにくい距離感がある。生徒たちには，当時星野氏が行ったであろう自分自身との対話や渡米の決断，現地で感じた思いについて，自分の立場で考えてもらうことにより，星野氏の体験を自分ごととして捉えられるような課題を設定している。単元開始時に考えた「遠い自然」について，単元学習後に何を語れるようになっているか。その変容を生徒自身に感じてもらえるよう手立てしている。

４．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

生徒を題材に引き込むために，本単元の導入で最初に行った発問は，“Where in the US would you like to visit?” である。思い浮かぶ場所が特にない場合は，アメリカの観光地や有名な場所を題材としてペアで話すように促した。こちらで用意した地図を見ながら生徒は活発に意見交換を行い，その土地について知っていることやその土地を選んだ理由などをペアで共有した。ペアワーク後クラス内で発表を行ったところ，ニューヨーク，ナイアガラの滝，サンディエゴ，マイアミ，シリコンバレーなどなど，様々な場所が出た。導入の最後の部分で，日本地図の沖縄のように，地図の端で切り貼りの形で表示されている州について尋ねると，生徒たちは “Alaska!” と答え，そのおおよその位置についても把握していた。その後，Alaska’s Three No.1 について以下のようにクイズ形式で尋ねた。

1. It is the（　）est state in the US.　2. It is the（　）est place in the US.　3. It has the highest（　）in the US.

2,3 については比較的スムーズに答えが出たが，1 については答え（largest）を確認した後，「知らなかった」というコメントが多数あった。その上で，アラスカの大自然や動物たちの写真を次々に示すと，その壮大さに，生徒たちからは感嘆のため息が漏れた。これらの写真全てを撮影したのが日本人の星野道夫氏であることに，生徒たちは大きな関心を寄せた。そこで，星野氏が長いアラスカでの生活の中で“distant nature”と“nature nearby”について思いを馳せていたことを紹介し，生徒たちにこれらがそれぞれ何を意味するのかを問い，自分にとってこれらが意味することは何かということについて，ライティング活動を行った。これが今単元の各生徒のベンチマークである。

4 つのセクションに渡り，生徒は主に以下の活動に取り組んできた。

セクション 1 ：① 1970 年代に渡米することの意味。多くの制限や困難がある中，自分なら渡米という選択肢を選ぶか。
②星野氏がアラスカの地元の人々との交流をどのように感じたか，本文に基づいて推論する。
セクション 2 ：①(写真を使った活動の後)グランドキャニオンやイエローストーン国立公園とアラスカの違いは何か。
②アラスカの四季：気温や日照時間の違いについて及び夏と冬の差をどう楽しんで過ごすか発表する。
セクション 3 ：①アラスカの人々の日常食について，パートナーに説明する。
②クジラ漁がどれだけ特別で大変なことか，本文に基づいて推論する。
セクション 4 ：①星野氏が言う“distant nature”“nature nearby”について，自分の経験を踏まえて発表する。
② ①の内容を単元導入時のベンチマークの作文と比べ，その変化を発表する。

単元導入時には，nature nearby は窓の外の木を指して“This is it!”という生徒が多く，distant nature は物理的な距離感のある自然を答えた生徒が多かった。しかしながら，上記のようなステップを踏んで単元を指導したところ，特に星野氏の言及である“distant nature in your imagination”の部分を参考にし，物理的な距離感のある自然のみならず，心理的な距離感のある自然について意見をまとめた生徒が散見された。

distant nature を心の中にいくつも持つこと。これはさながら心の中にいくつかの「チャンネル」を持つようなことであり，自分が物理的にどこにいようとも，チャンネルを切り替えることでいつでも distant nature への行き来が可能になり，心を解放することができる。このようなマインドセットこそが，真の意味の心の豊かさを意味するのではないか。生徒の発表を聞きながら，そのような深い感動を味わうことができた。

今単元を通じて，生徒たちは「自分対外界」だけでなく，「自分対内面」の対話を主体的に積み重ねた形跡が見られた。導入時のベンチマークと総括時のキャップストーンを比べることで，生徒たち自身がその変容を大きく感じたところである。そしてその変容の軌跡が，授業者である私にも一つの新しい思いを抱かせた。このように，生徒がエージェンシーとなる学びをさらに深め，今後も続けていく必要があるだろう。今回の実践で残った課題は，授業内のインターラクションが，生徒対生徒，教師対生徒に限定される場面が多かったことである。教師対生徒対生徒対…教師という形で，教師と生徒の間にどれだけ他の生徒を関わらせることができるかという点について，今後も研鑽を続けていきたい。

公開研　公開授業Ⅰ

外国語（英語コミュニケーションⅡ）「インタラクションを通した内容理解 ～ルーティンと即興性～」

授業者　豊嶋　維

１．研究主題との関わり

本授業では生徒間及び生徒教員間でのやり取りを通して、単元で取り上げられているトピックを理解し、更には教科書の内容から発展した内容まで自分の言葉で話すことができるようにするために、授業の一部分の形式をルーティン化して実施しているものである。上記の形をとることで、授業をオールイングリッシュで行い授業での使用言語を極力英語にすることを可能にし、またルーティンから少しずつ発展的な内容に進んでいくことで生徒が難しさを感じる即興的な発話もしやすいようにしている。

本単元はコートジボワールのカカオ農園におけるジェンダー格差を取り上げたもので、教科書記載の内容と合わせて日本における身近な話題も取り上げて生徒の理解を深めるようにした。教科書の内容については、本文の内容に関わる質問を教員から口頭でし、ペアで相談する時間を少し取ってから生徒を指名して質問の答えを確認する。内容確認を経たのち、Chorus reading の形で正しい音声をガイドしながらの音読活動をし、補足的に文法の説明を１分程度行う。この形式をルーティン化しており、年度の初めから生徒に提示し実施している。展開を生徒が把握していることから全ての指示を英語で行っても生徒は問題なく取り組むことができている。また口頭質問についても内容に応じて難易度を調整することで生徒たちは問題なく取り組むことができ、ペアでの確認時間を取ることで教員とのインタラクションの準備をできるようにして英語が苦手な生徒への授業参加を促している。

教科書の内容が終了した後、発展した内容として日本の中のジェンダーギャップを取り上げ、ペアで話したのち指名して発話を促した。このトピックについては生徒たちにとって初めて話題にあげるトピックで即興性の求められるものだが、できるだけ教科書で学んだ内容や表現が使えるようにトピック導入時の教員の発話の中に教科書に出てきた表現を多めに含むようにして、即興性が求められる箇所にも安心感が持てるようにした。また答えやすい難易度を下げた質問から質問を重ねることで発話を増やし咄嗟の発言が苦手な生徒には段階的に対話ができるような工夫をしている。

２．評価方法　～ パフォーマンス課題の設定 ～

知識・技能の観点では「正確な英語を使うこと」「単元内で取り上げた語彙や文法項目を身につけること」を基準とした。思考力・判断力・表現力の観点では「コートジボワールにおける女性労働者を取り巻く環境やその問題を理解していること」「自分の意見を他者に伝えようとしたり、他者の意見に耳を傾けること」を基準とした。主体的に学習に取り組む態度の観点では「ペアワークに積極的に取り組むこと」「自分の考えを自分の言葉で表現すること」を基準とした。

また本授業の冒頭に帯活動の単語テストを行ったが、それへの取り組み具合も知識・技能面に加味している。

３．単元計画

全４回の授業計画の中で、本授業は４時間目にあたる。すでに初回の授業でレッスン全体の通し読みを行っており、全体的なストーリーは把握した上で各セクションの詳細を確認するという段階を踏んでいる。使用教科書の特性上、最後のセクションはまとめの内容になっていることが多いので、本授業では今まで学んだ内容の総括を簡単にし、教科書にはないオリジナルトピックを提示して考え、生徒間で話す時間をとることにした。ジェンダーギャップは身近な話題ではあるが、外国で起きている遠い存在ではないことを実感してもらうため、“What kind of job do female workers have in Japan?”, “Do you think there is a gender gap in Japan? If so, where?” という質問を投げかけた。

ルーティン化している部分の形式は以下の手順を取っている。①本文を音源とともに一度黙読、②口頭で内容確認

の質問を投げかける、③生徒は解答を本文から探す、④指名して答えを聞く、⑤答え合わせを行いながら本文内容を解説する。オールインイングリッシュの本文解説とは切り離す形で、重要な文法事項や構文について日本語で解説する時間は、本文の理解を終えて、音読活動を行なった後に、1～2分程度行うようにしている。

4．評価の実際　～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

高校入学当初より英語に苦手意識を感じている生徒も少なからずおり、そういった生徒の積極的な授業参加を促すことは難しいが、年度当初に形式を提示しそれを継続しているとやるべきことが無意識に身についてきて活動にも参加でき、ルーティン部分に少し負荷のある活動を付け加える形にすればプレッシャーをさほど感じずに活動に挑戦することができている。またルーティンワークから徐々に難易度をあげていく形にすると、英語が得意な生徒にも発展した内容の問いかけをすることができている。

具体的には内容確認の質問の投げかけとその答え合わせについては、本文の引用をしたり、その言い換えの形で提示したり、また具体例を加えて説明をしたりと複数の視点からの説明をしている。まず本文のどの箇所について説明をしているのかを示し、簡単な英語でどういうことかを示して、かつ具体的な例示をすることで、本文内容をぼんやりと理解していた生徒も明確なイメージを持つことができるようになる。英語が苦手な生徒は教科書のどの部分の話をしているのかを明示することで安心感が得られ､その後の説明も聞いてみようという意識を持たせることができる。また英語の得意な生徒には更に質問を重ね理解度ややり取りの力がどれくらいあるのかを確認することもある。授業内での教員との一対一のやりとりにより生徒がどれだけ理解できているかは測れるので、できるだけ毎回違う生徒を指名しながら理解度を測るようにしている。

英語の知識面をある程度蓄えた高校2年生が一番難しさを感じているのは、即興的なやり取りである。そのため、即興的なコミュニーケションは常に意識をしてトレーニングしたい部分ではあるが、即興的に生徒が話した内容を評価することは難しい。そもそも苦手意識が先行したり緊張感が前面に出てしまうと生徒の英語力は適切に測ることができておらず、スピーキングテストのようにテストの形式にしてしまうと実力を発揮できない学生が多いように感じる。その問題を解消するためには授業で意識的に英語を話すハードルを下げることが効果的であると考える。そのための手法として、本授業で実施しているルーティンから即興に繋げるという方法が挙げられるが、他にも英語を使うペアワークを必ず毎授業において行ったり、クラスメイトと英語で話す機会を設けておくということが考えられる。教室内でのペアワークでのスピーキング活動は必ずしも教員が張り付いて評価をすることはできていないが、話しかける相手がいることで取り組むモチベーションも維持できるし、普段から英語で話すことをしていればクラスメイトに英語で話しかけることのハードルも下がり、教員とのやり取りの際にフリーズしてしまい評価不可能、ということはなくなる。ただし日々の生徒の発話は本授業の形式ではわずかであり、録音・録画をするとそのデータ処理の手間があるので、クラス全体に向けてのプレゼンテーションやスピーチも定期的に行い、合わせて評価することも重要であると考える。プレゼンテーションやスピーチは事前に準備して臨むものなので質の違うものではあるが、ペアワークを熱心に取り組んでいる生徒は発表活動への取り組みも積極的で、相手に伝わるような発表を行おうとする姿勢が見られるため、普段の取り組みと組み合わせて評価することは一定の意味があると感じている。

本授業では生徒が発話する際にプレッシャーを感じないように教員からの発話を多くしてその流れの中で発言させようとしていたが、そのせいで教員が喋りすぎているという実態があった。沈黙が不安でつい場を繋ごうと喋ってしまうのは生徒からの発話の機会を得るという意味ではあまり良くないという気づきがあったので、ある程度で区切りをつけて生徒のターンに回していく必要がある。更にその部分もルーティンに組み込めれば本授業の改善につながると感じた。

研究協議会

外国語科（英語）「生徒の発話を引き出す授業実践」

提案者　豊嶋　維・加藤　淳
助言講師　東京学芸大学名誉教授　金谷　憲

１．本校からの提案

英語授業の実践において、生徒の発話を引き出す授業実践が重要であることは、いつの時代でも変わらないことである。今年度の授業実践では、生徒とのやりとりや場面設定の工夫を通じて、題材の深い内容理解や生徒の主体的な学びを促す授業実践を試みた。今回の協議会では、日々の工夫を共有して、「より良い授業」を模索していく。

２．協議会における議論

・公開授業の内容について

生徒の発話を促すために、スモールトークや英問英答の場を設けている授業を日頃から行なっている。生徒の英語力の伸長のために、今まで考えたことのなかったトピックを与えたり、言いたい英語がうまく出てこないというような経験ができるような難易度のタスクを与えたりすることもある。

・観点別評価について

主体性を測るということは難しい。A 評価が、主体性が高く真面目であるというのならば、その逆の C 評価が表すのは不真面目であるというのも少し違う気がする。勉強をして、ある程度のレベルの成果を示すことができれば、その生徒の主体性の結果であると認めてあげてもいいのではないだろうか。学力が高い生徒が主体性の A 評価を得られるというわけではなく、頑張っているけれども、なかなか成績に結果が現れない生徒に対して、日々の努力を認めるためのものとして利用することもあわせて考えていけばいいだろう。

思考力・判断力・表現力の評価材料とするため、特定の言語材料を示さずに問題を出題するケースがある。特定のものを示さないとしながらも、解答者の熟達度を測るために、生徒から引き出したい言語材料があるのは確かである。解答者である生徒は、その意図を汲んで問題に答え、得点を得るのだから、その問題で測っている力は、忖度力とも言えるかもしれない。その一方で、忖度という言葉は、後ろ向きなイメージを含有するが、忖度は思考することでできることでもある。

公開授業の中で、英語の熟達度の高さが伺えたのが、再話活動の際に丸暗記になっていないことである。自分が考えたことを英語で話せるようになるためには、学習開始時期が早いことが重要なのではない。どのようにして、生徒に繰り返しその言語材料を使わせるかの工夫にかかっている。その繰り返しで身につけた結果を、教員がきちんと評価してあげられることが重要なのではないか。

・より良い授業に必要なことについて

高等学校の授業は、中学校の授業と比較をして、教員の発話量が多い傾向にある。内容が高度になることは確かだが、生徒にもっと活動をさせることで、学習内容が定着していく。公開授業では、授業で学習した内容を論理的に組み立てて、質問をするという実践がなされたが、今回のような活動がさらに増えると、良いのではないだろうか。教員も、生徒を観察するにとどまらず、生徒の中に入って、思考を活性化する一助になれると良い。教材の枠を超えて、内容を深掘りするのも良い学習だとは思うが、限られた材料を駆使して、自身の考えをアウトプットできるようになるのも１つの実力だろう。

３．課題

生徒とのやりとりを増やすことで、生徒の発話量を増やすしかけ作りが、今後も求められる。教員がより生徒の中に入って活動することで、生徒 Agency（生徒の主体性）の発達に寄与することができるのではないか。協議会での議題を、日々の授業実践で形にしていきながら、広く共有できるアイディアを考案していく。

４．公開研での議論から

本章では，公開研での様々な議論を踏まえ，今年度の課題を挙げると共に，次年度の取組に活かすべき点について整理する。

⑴ 生徒 Agency を言語化すること

白井（2022）では，生徒 Agency について「統一的に適応可能な『エージェンシー』の定義を作ることは不可能だとしても，その概念自体はどのような文脈でも関連性がある（OECD, 2019）」としている。つまり，“生徒 Agency を育む”という取組には，本校という文脈の中で生徒 Agency が定義され，言語化していく作業が必要となる。数年間かけながら，“本校における生徒 Agency”についてイメージを共有させていくことが必要なのである。

今年度の研修では，生徒 Agency と主体性の違いに，“責任”という語を示してきた。そのため，やや“責任”という語が一人歩きしてしまった印象もある。また，図 1 に示した生徒 Agency を育む条件についても，うまく当てはまるは教科，そうでない教科が見られ，今後も図 1 を叩き台としながら，生徒 Agency を育む条件を模索していく必要がある。つまり，このような作業こそ“本校における生徒 Agency の言語化”なのである。

さて，そのような中で，いくつかの教科・科目の取組が大きなヒントになると考えられる。まず，芸術科（美術工芸）での協議会では，生徒 Agency を育むための手がかりや授業改善のポイントとして，以下のような議論が見られた。

・芸術は役立たないけど，役立つものである。芸術は自分や社会にとってどのような価値があるのかを，考えることができるよう授業を展開する必要がある。
・外部の人たちと連携し，具体的なプロジェクトを設定する。生徒自身がプロジェクトを設定し，自分事として関われるものにすると尚良い。
・生徒同士でも交流する場やきっかけを意図的に作ることで安心感が生まれる。他者からの評価が楽しさにもつながっていく。毎時間の 1 分で十分なので，自分が今取組んでいることを話せる時間を作ると良い。

つまり，“社会における責任”という高尚なものを考えるためには，“社会における価値・役割・意義”を考えることが必要になるということだ。また，“社会における責任”を考えるためにも“外部の人たちとの連携”や“生徒同士の交流”という仕掛けが必要になる。

次に紹介するのは，国語・言語文化の公開授業の事例である。古典分野の文脈においては生徒 Agency を「自分の見方・考え方を相対化する能力」と表現している。このように自分の教科の文脈における生徒 Agency を言語化することは，社会における価値や役割を考える上でも大変重要な過程と言えるだろう。

理科・化学基礎の公開授業の事例でも同様である。社会と科学技術の繋がりを考えて，“素晴らしい”電池を生徒に定義させると共に，“素晴らしい”化学電池を作成する授業であった。工芸の授業と同様で，生徒に“価値判断をさせる機会”を設ける点は共通しており，“実社会とのつながり”や“価値観を変容させる機会”を意識した授業づくりとなっている。

また，公開研における白井先生の講演の中にも多くの

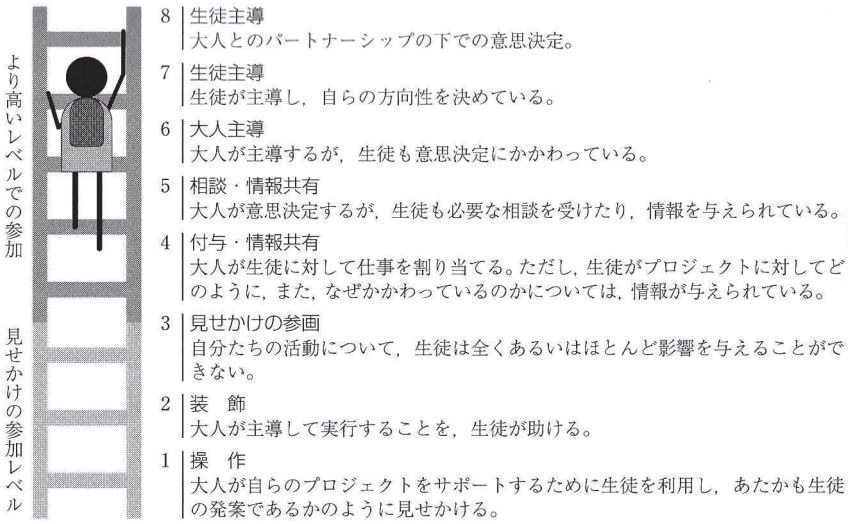

図２　ハートによる梯子のモデル（Hart, 1992）

ヒントがあったように感じる。彼の発言を２点紹介する。これらは白井（2022）の内容を超えて，より教育現場の実践に即した助言である。

・（生徒エージェンシーを学校の中で育むことについて）図２は梯子モデルというものであるが，全ての教育活動の場面で“レベル８ 生徒主導”を目指す必要はない。ただし，生徒・教師も様々なレベルがあるということを知り，場面に応じた適切なレベルに主体的に動けることが重要である。
・（ニュー・ノーマルの教育の特徴として），生徒・教師それぞれがエージェンシーを発揮することが重要。ただ，教師だけでなく，全ての人にエージェンシーが必要。

⑵ 教科・科目の融合・連携すること

今年度の教員研修では，各教科・科目のカリキュラムをマッピングし，お互いの授業でどのような内容を扱っているのか把握できるようにした。これはカリキュラムマネジメントの観点から，お互いの教科・科目での連携をとりやすくするためのものである。また，カリキュラムオーバーロードの問題も指摘されている。本校のカリキュラムも例外ではなく，教科・科目の融合・連携を図り，より深い学びの実現と共に，効果的・効率的なカリキュラムの実現を目指したい。

また，昨年度の公開研における講演会にて，市川先生より「学習の転移」について，“転移は起こそうとしないと起きない”と発言されていた。つまりカリキュラムの中で計画的に教科・科目間で連携しないと，学習の転移が起きているかどうかを確認することはできないということである。それぞれの授業での学びが学習者にどれほど身に付いているかを検討する上でも，教科・科目間の連携は有効である。

公開研の実践の中でも，いくつかの教科の取組に教科・科目の連携の様子が伺えた。まず，理科の物理基礎と化学基礎の取組についてである。理科では「生徒による実験デザインと評価活動を通して生徒 Agency を育む」という共通テーマのもと，公開授業を行い，科目間での連携を深めようとする取組であった。今年度に限らず，物化生地でのカリキュラム改善に継続的に取組んでいる。また，数学の協議会の課題の中には，情報科などの他教科との連携が挙げられている。今後，さらに教科融合・連携を中心的に考え，カリキュラムマネジメントを進めていきたい。

⑶ 生成 AI を活用すること

生徒 Agency を育成することからは一見離れる話題であるが，いくつかの教科の協議会においては生成 AI についての言及が見られた。中でも国語の協議会においては，“生成 AI によって文章等を生み出すことが可能になった今，人間の主体性をどのように捉えるか”について議論が及んだようである。教科・科目間の融合・連携とは別の意味で授業の形を大きく変える可能性がある生成 AI であるので，その活用については，今後学校全体として取り組むべき課題と言えよう。

５．おわりに

最後に，４章を踏まえて，次年度に向けての課題を整理すると，①生徒 Agency の言語化，②教科・科目の融合・連携，③生成 AI の活用，の３点である。この３点の改善させることを目指して，表２のように教員研修を進めていく予定である。

また，次年度の公開研は教科・科目の融合・連携を副題に設定して，実施していく予定である。毎年，教科・科目単位で行ってきた本校の公開研であるが，次年度は教科・科目の融合・連携した授業単位で運営を進めていくことを考えている。

さらに，今年度は授業を中心に“生徒 Agency を育む”ことを考えたが，生徒 Agency を育む場は，当然「授業」のみではない。生徒が主体的に活動する「学校行事」や「HR 活動」のあり方，生徒の自己実現を支援する「キャリア教育」のあり方を考え直す契機として，生徒 Agency について，さらに議論を深めていきたい。

謝辞

この度の公開研では，白井俊先生に大変示唆の多いご講演を頂いた。この場を借りて深く御礼申し上げる。

引用文献

Hart, R.（1992）Children's Participation：From Tokenism to Citizenship. *Innocenti Essays* No. 4, UNICE（ https://www.unicef-irc.org/publications/pdf/ childrens_participation.pdf）. 2024 年 2 月 8 日

OECD（2019）OECD Learning Compass Concept Notes（ https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf ）. 2024 年 2 月 8 日

研究部（研究推進）（2022）「観点別学習状況の評価を活かしたカリキュラム・マネジメント － いま問われる学習評価と学校の在り方 －」東京学芸大学附属高等学校研究紀要 , 60, pp.79-108,
白井俊（2022）「OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来　～エージェンシー，資質・能力とカリキュラム～」ミネルヴァ書房 , pp.91-92, 95-96